
猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

三歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と

【Zコード】

Z6260Y

【作者名】

三歩

【あらすじ】

写しの世界…今いる世界と対となるもう一つの世界は魔法文明が発達した世界だった。主人公の月影光太は”写しの世界の自分”に向けられた（勢いがつき過ぎた？）聖なる槍に貫かれ写しの世界へと引き込まれてしまい…。そこで彼は猫耳の少女ミルと出会い世界を救う（かもしれない）行動に出る…。

ライトでチートな異世界トリップ物語…愛を感じたい方にささげる作品です。

プロローグ（前書き）

開いて頂き感謝・感謝です！

プロローグ

「眠い…」

目を手の甲でこすりながら朝の街並みを歩いていく。
勤めている会社に出勤するため最寄駅に向かっている。

因みに就職して2年目だが今年、うちの会社は新規採用を取らなかつたのでまた下っ端だ…朝も少し早めに行つて色々と用意しないとチクチク上司に嫌味を言われる。

バーガーを右手に、ドリンクを左手に持つて食べながらテクテク歩いていく。

眠いのはタベやり過ぎてしまつたから…新作ゲームを。タイトルは「転生勇者 vs 異世界トリップ勇者」だ。

説明書には「初心者は転生勇者の方が扱いやすい」と書いてあつたので迷うことなく異世界トリップ勇者の方を選んだ…。
はい、ヒネくれてます（笑）。
そんなこんなで歩いていると、

ピシッ！と変な音がした…。

周りの景色がストップした…。

目の前の空間にヒビ（？）が入つて割れた…。

はい？

中から、美女が飛び出してきて抱きついてきました…。

ラッキー？「グサ！」

え？

この女性…背中に何かはえている…。

異空間（？）の方から伸びている物…槍の柄？

三叉の槍が女性の背中に刺さっている…。
あれ？俺にも…刺さっている？

急に引っ張られた…。

槍の柄が元の空間に引っ込んで行く…。

びつもこの槍の穂先…”返し”がついているみたい。

だから…、つまり…、暗いその空間に自分も引き込まれる…ってわけだ。

やつぱし…タベは…転生勇者を選べばよかつたかな?意識が遠のいていくのを感じながら俺、月影光太は…そんなことを考えていた。

プロローグ（後書き）

更新は毎日朝7時00分の予定です。長めでノンビリ書いて行きます。

眠い空間のなかでの対面（一）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（一）

眠い…ひたすら眠い…。

気持ちがいいとこつか…ひたすら眠い…。

(…おい、……か?)

ぼつとしつている意識に何者かが語りかけてくる…「あなたが」。

(新聞も宗教も間に合つてゐるよ。)

(…新聞はともかく、…そつちの世界は宗教を押し売りするのか
い?)

(ああ、ひないだ駅のホームでイキナリ祈られてくれって。迷惑だ
よ。)

(祝福を無料で?かなりいい話ぢやない?)

(言い訳ないじやん。別に宗教に文句つけてるんじゃないよ、イキ
ナリ声かけられたらびっくりしするんだよって話し…、てつ!誰?)

眠い目をやつとのじとで開くとすぐ田の前に美女がいた。

今の状態は抱き合つているといつて良い。

北欧系の人種かな?白に近い金髪に灰色の瞳、見つめていると吸い
込まれそうな気になる。抱き合つてしているので、つまり密接している
のでよくわかる、スタイルは抜群だ。

(アイ キヤンノット スピーカー イングリッシュユー)

(イングなんとかがしゃべれない?…なんだ?)

田の前の美女がしゃべった。

日本語で?なんか口の動きと言葉が違う様な気がする。

(日本語しゃべれるのか?)

(?…そっちの言葉かい?全然ムリムーリ!)

お手上げのポーズをしてきた。

なんかこのポーズは美女には似合わないな。

(これは推測だけどね、声が頭に直接聴こえる気がするんだ。この空間の特徴か、あるいはコレと一緒に貫かれている影響か…。なんにしろ「ミコニケーション」取るのは便利だよな。)

そうだよな、異世界に行ってまず、始めにぶつかる困難は会話や言語…つまり意思の疎通が難しいってことだ。

タベもゲームでそれをなんとかするイベント「言語理解の魔法を手に入れる」をやつたつけ。メツチャゴ都合主義なイベントだよな。

あれ?異世界?

眠い空間のなかでの対面（2）（前書き）

感謝・感謝です！

黙って空闇のなかでの対面（2）

ゲームや小説でよくある話だけど、現実に起じるとちょっと焦るな。

（えーと、「ドコドコ？」タシダレ？）

（それだと記憶喪失から目を覚ましたばかりの人っぽいんだけど（笑））

（お約束に突っ込んでくれてありがとう。で、ドコ？ダレ？）

（今度は思いつき短くしたなあ（笑）。さすがオレの「[印]し」なだけある）

（「[印]し」？）

（簡単に言つと、オレの世界と対となるもう一つの世界、「[印]しの世界」があるらしいんだ。そこにはもうひとりの俺が、「[印]しの俺」がいるみたいなんだよ。つまりそれが君だと思うよー。）

（わからないことが多いけど…なんで俺が？ていうか男言葉似合はないねキミ。）

（ソロソロ消えるよ…[印]の姿。）

見てみると、顔が変わっていく。

触れ合つていて柔らかい女性の体が、固い筋肉質の体に変わって行くのが感じられる。

やがて男性…服装はそのままだけど…になつた。

（俺そつくり…）

（変身の術…。なーそつくりだら…だからそつだと思つよ。）

（うん、キミの言つ「[印]し」って説明は理解出来た…体感的にはなんかすつじく損した気分だけど…今までの姿は…）

（惚れた女の姿だよ…影武者つてのをやっててね…彼女の身代わりに聖なる槍の攻撃を受けたってわけさ。）

(そうか…男だね！エライぞ俺…)

(オレだオレ！お前じゃないだろ…。まあ…、オレじゃこのくらいがせいぜいなんだよ…。)

(その言い方、なんか身に覚えがある…まさか彼女には彼氏がいるのか…俺意外に。)

(だからお前じゃないだろ…。まあ、向こうはオレのこと最高の友達って言つてくれてたしなあ。)

(必殺・生殺し！だね。)

(くつ、さすがにオレの[写]し…グサつときた…でも俺の[写]しなら同じ様な経験あるんだろ？)

(グサつときた！返された…さすが俺の[写]しだぜ…)

なんか恋の話で盛り上がりてしまった。異世界の話はどうこつたんだろう？

眠い空間のなかでの対面（3）（前書き）

感謝・感謝です！

眠い空間のなかでの対面（3）

（まあ、話を戻そう。ダレ？はもうここや。ドリ？の話をしてくれる。）

自分と抱き合つて…正直変。

周りを見渡すと、今こるのは直径10㍍くらいの光る球体の中みたいだ。

外がうつすら透けて見えるけど様子はよくわからない。

（まあ、槍から散々逃げ回ったからどうにいるのかよくわからん。…因みにこの球体は「聖なる槍の結界」だと思へ。）の中で封印されて一生を過ぐすのだ。

（…今さらりとす）ことイワナカッタ？封印？出られない？
ハツ！俺がこうなった理由がまだわかんないままだった！
（この状況で案外平気だなあ、たぶん…槍の力が強過ぎたんじゃないかな？…大魔王クラスを封印する力を俺みたいなペーペーに使つたから…だから「写しの世界」にまで影響を…まあ、この辺は俺も全然わかんないから推測だけだ。）

（そりか…つまり…全てはこの槍を使ったやつのせいか！）
（そこで、オレを恨まないところがオレの『写しだよな』。「ザ・責任は他人にあり」思考…）
（くわい、責任者出でこない…つてくるわけないか。）

（（グスン…ゴメンなさい（泣）））

あれ？なにか女の子の声が聞こえたよつた。

魔法を使ってみよー（一）（前書き）

感謝・感謝です！

毎回そうですが、かなり悪ノリ・ライトで行きます。

魔法を使ってみよ'づー。(ー)

(何か聞こえなかつた?)

(?…いや、なにも聞こえなかつたぜ。)

空耳かな?

(まあいいや。それより、このカツコどうにかならないかな?… そういえば、刺されるのに痛くないや? そっちは?)

(こっちも痛くはない…。俺も又聞きだからよく知らないけど、伝説の神器”聖なる槍”には「魔破」の力と「封印」の力があると聞いている。その槍が俺に向かつてショビビーンと飛んで向かつてきてから必死で逃げただけビズーと迫いかけてきてな。ついに刺された!と思つたらお前に会つて、その後、この球体が現れてさ。痛みはないけど、なんか力が抜けてやたら眠たいんだなこれが…。)

聖なる槍の封印の効果なのか?
自分のほうも眠気は覚めない。

(もしかして寝たら封印中ずっと起きなくて眠り姫状態か…。苦しくないのは古いけどやだな。)

(じゃあ、眠くならないように、暇つぶしにそつちの世界のこと教えよう。)

(その前に質問…さつきの「変身の術」って魔法?
(当たり前だろ?…まさかそつちの世界にはないのか?)
(ピンポーンその通り! なあ俺、魔法を使えないかな? ワクワク…)
(うーん…、カード魔法ならすぐ使えるかもな…? やつてみる?)
(マジ…せむやるーなんでもやるー)

なんか今残念な状態だけど楽しめることは楽しもう。
魔法力モン！

魔法を使ってみよ!（～）（繪書も）

感謝・感謝です！

魔法を使ってみよ'ー。(2)

ジャジャーン！

とこつことで魔法を使つてみるとことになつたー。
できるかな？

（封印の効果で使えないかもしれないけどな。）

そう伝えてからカードを3枚出してきた。

（好きなの選びな。）

そう言つて渡されたカードには
「霧？」、「手」、「オーロラ？」の絵が描いてあった。

（精靈属性の「霧化」と、ノーマル属性の「触診」と、光（聖）属性の「聖幕」のカードだ。光（聖）属性のカードはお前がオレと同じ闇（魔）属性だと心ポケットに入れられないし、使えないけどな。（心ポケット？）

（まあやつて見たほうが早い。どれか選んで心のなかに、胸の奥底に入れつて願つてみな。）

まあやつてみよう。

心に入つておくれよカードさん…お気楽過ぎかな?
おつと、うつかりどれか選ばないで願つてしまつた。
が、手から全部のカードがふつと消えた！

（なんだって！全部入つたあ！？）

まだ魔法使ってないけど……案外すごいらしいな、オレ！

魔法を使つてみよ'ー。(ω) (謹書也)

ストックがたまつましたので、今日と明日の時と1~2時の2本を
アップします。

魔法を使ってみよ'うー。(ω)

魔法カードが全部俺のなかに入ったのをみて異世界のオレがびっくりしている。面白いな、自分がびっくりしてゐるの見つて。

(ビックリドッキリだね！…でもこくつかわかったよ。まあ、心ポンケットが3つ以上…普通一つだからこれはすこじー！)

もしかしてチート？

(ふたつ目は、光（聖）属性のカードが入ったから、属性が闇（魔）ではないこと。ちなみに「これはに入るか？」)

もう一枚渡された、これには「黒い球」が描いてある。闇（魔）属性のカードのようだ。

もう一度同じように念じるがカードはそのままだった。念のため一枚出して念じたが、ダメだったんで返した。

(光（聖）属性決定だな。ちなみに属性は、無しがノーマル系、地火風水などの精霊系、そして光（聖）系と闇（魔）系つてのがある。)

光と闇は反発しているので逆の属性カードは心ポケットに入れられないとのこと…この辺り細かいルールがあるらしい。

(あと、”魔法が使える魔力がある”ってことだ。そもそもそれが足りないと心ポケットに入らない。3枚分だから…少なくとも初級の魔法使いよりは多いな。)

まあ、その辺はいいや。ともかく使ってみたい！

(どれ使おうかな？「霧化」使つたら霧になれる？槍から抜けられるかな？)

(まあやつてみ。使う」とを強く念じればいいけど、始めのうちは声に出したほうがいい。)

日本語でいいかな？

「霧になれ！」

一瞬自分の姿が細かい粒子になる感触があつたけど…それが消された感触も感じた。

(やはり、聖なる槍に邪魔されてるっぽいな。)

(じゃあ、「聖幕」は？なんか同じ「聖」だしかかるんじゃない？)

(かもしれないがやめてくれ！闇（魔）属性の俺には辛い！結構強力なレアカードなんだぜ？）

(自分が使えないのになんて持つてるんだい？っていうか、そんなん渡すなよ。)

(何かの交渉に使えるかなって…前に神殿に潜り込んだ時に拝借しといたんだよ。それに俺の写しだから闇（魔）属性だと思ったから、その確認用。)

(ふーん、じゃあ「触診」は？)

(手で触つたものの情報を引き出せるカードだ…聖なる槍を触らなければいけんんじゃないかな？)

そうか、なら改めて！

「触診！」

触る対象は自分の身体…つてづわ！

(どうだ？頭のなかに情報が浮かんできただろ。自分が一番わかり

やすい形で情報化されるはずだ。)

(ゲームのステータス画面だ！ … わかりやすい！)

自分のステータスを見る。 … あれ？
心ポケットの数のところ、解析不能つてでてる。

(なあ、 どうだ？)

(… うーん、 色々と数値が出てるけど、 多いのか少ないのががわから
らないなあ。)

(ならオレ触つてみる。 比べてみな。)

そりしょひ。 手を楽な位置、 抱き合つている相手の背中に添えるが
コジンと何かに当たつた… ああ槍が刺さつてたつけ。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）（記書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（1）

「触診」のカード魔法で自分のステータスを確認して、この世の世界のオレと比べようと手をオレの背中に回したら、誤まつて刺さっている槍に触ってしまった。

• 57 58 59 60 •

「触診」の効果は、聖なる槍に弾かれてかき消されると思っていたが…。

そんなことはなく、聖なる槍の情報が浮かんできた。
長さは6m、重さは1kg…軽いな。穂先の形状は三叉と…。

減つていいく数字が見えるんだけど。これって、…カウントダウン？

（槍の情報が見えるよ。）

（本当か？どんな様子だ？）

（なんか、カウントダウンしてるんだけど。）

（カウントダウン？何の？）

（ああ？）

（気合を入れればもうとよくわかるぜ？やってみな。）

じゃあやってみよう。

槍を握りその中を深く染み入るよう感じてみると、3Dの画面が出てきた。

(…なんだあ？中に女の子がいる？しかも猫耳！)
(（私が見えるのー）)
(うん、…猫耳さん何してんの？)
(（時間がないのーお願い手伝つてー）)
(イキナリ…なにが起こつてこるの？)
(（この槍の力が暴走寸前なのー）)
(…このカウントダウンもしかして？)
(（もう世界が滅亡するくらいの力なの。これがこの世界が無くなるわー）)
れば、あなたのいた[写し]の世界もなくなるわー）

…す「」ことが起つるのがあと一分くらいみたい。
どうする？

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（ー）（後書き）

あなたなら、あと一分で世界が滅亡するくらいのならなにをしたいですか？

我なら好きな人と手をつないでいたいですね。

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（2）（記書き）

感謝・感謝です！

あなたは世界を救いますか？はい・いいえ（2）

じりじょりへ。

考えてこねりけりも…カウントダウンがどんどん進んでこぐ。

•
4 4 4 5 4 6

取り合えずなにを求められたか確認しよ。

- (なにをすればいいんだ！)
- (おーい、もしかして槍と…)
- ((受け止めて！この力を！あなたにしかできないの…))
- ((できるのか？絶対？確実に？))
- ((絶対とは言い切れないけど…))
- (やるよ。その代わり何かよこせよ…)
- ((何を？))
- ((なんでもいいよ。報酬があるほうが燃えるじゃん…))
- ((え？え？え？))
- (時間ないんだろ。早く始めろよ。じりすればいい？)
- (心を開いて…何でも来いって思つて…)
- (アバウトだな、OK何でもここ…)
- もう一人のオレよ、俺は世界を救うぜ…)
- (…勝手に話してたな。わけわからん。まあ、面白やうだから好きにじり…)

そして、急に胸の奥底が熱くなつた。

身体が発光している！

グッ…俺カツ…コ…いい…かも！

カツ…コ…つけた…グッ…苦…しい…！

ヤッ…パ…リ…やめれば…よかつた。

シャレに…なんない…。

グッ…あ…あ…あ…！

大魔王シェリー

大魔王シェリーが語ります。

東の空の山々がくつきりと浮かび上がってきた。月明かりしかない夜は、闇を見通す力を持つものが多い魔族に有利な時間だ。しかしもうすぐ終わる。夜があけると同時に、人間側の攻勢が強くなるはずだ。

魔軍を率いる彼女、大魔王シェリーは宙に浮かびながらそう判断をした。ならば…夜が明けるその前にもう一撃。

彼女は魔力を抽出して手のひらに集める。物理的な衝撃と精神的な衝撃を相手に与える闇玉ダークボールを打ち出す。闇玉は前方下方にいる人間の軍勢に近づくに連れて分裂し雨のように降り注ぐ。軽く数えても数千の人間の上に降り注いだはずだ。爆発で視界が塞がっていたが、しばらくすると…無傷の人間たちが見える。

またかとウンザリする…人間の歌声が聞こえる…闇の魔力を打ち消す「聖歌」の魔法。地上の部隊が苦戦している最大の理由がこれだ…。ある一定以上の人数が歌わないと効果がないという。そのため、断続的な攻撃を続け疲弊させたり、分断しようとしたりしたが、今のところうまく防がれている。

空中戦ができる戦力はこっちが圧倒しているがあの魔法があるせいで攻めあぐねている。こう着状態と言つて良い。

(シェリー！あっち！)

”影”からの警告を受けてそちらを向くと、こちらの戦力を粉碎しながら一直線に近づいてくる一団が見えた。見慣れぬ白い法衣を身上に付けたその者達から感じる”力”は今まで相手にした者達には感じなかつたものを感じた。

「ふふ、ファイガード王国はアンノルファイ教の戦闘賢者どもを借

り受けたか。面白い！相手になつてやる！」

女神アンノルファイを主神とするファイガード王国はアンノルファイ教と親密な関係を保つている。アンノルファイ教は国政に積極的に干渉しないが協力を惜しまないところがある。為政者には扱いやすい宗教と言えるだろう。最もそういう姿勢で王国に取り入つてゐるから栄えている宗教ともいえるだろう。その辺は彼女にはどうでも良いことだつたが。アンノルファイ教の聖職者の中で戦闘賢者は一騎当千の実力を持つてゐると言われる。

一団から一騎…ペガサスに乗つた者が近づいてきた。周りの者がその進行を邪魔させないようにしてゐるあたり、自分に当てるべく最大戦力なのだろう。近づいてきた者をみると白銀の鎧を身につけた女戦士と猫耳の少女だ。女戦士の方には見覚えがある。もう一人は見覚えがなかつたが、猫耳なのは女神アンノルファイに愛でられている者の証、悔れば痛い目を見るのはこちらだ。

「久しいな！サーラ王女！この前は楽しませてもらつたぞ！必死に逃げて行つた姿は滑稽だつたぞ！はははは！今日も楽しませてくれ！」

「大魔王ショリー！今日こそは…お前の見納めだ！」

サーラの言い回しに引っかかるものを感じた。何度倒されても向かつてきては高飛車な口上を繰り返していた彼女にしては勢いがない…含みを感じる。

「ミル…頼む。」

「はい！お姉様、『武運を！』

そう言つと両手を組んで祈りを捧げるかのように頭を下げた。

「姫巫女の名において…召喚“聖なる槍”！その大いなる力を貸し与えたまえ…。我を人柱に！」

そう歌うように言葉を紡ぐと少女は光り輝き三つ又の槍になつた。信じられないような光（聖）属性の力を感じる！ショリーは生まれて以来、始めて恐怖を覚えた。

サーラが槍をこちらに突き出すと槍から光が溢れ出しこちらに向か

つてくる。

とっさに光（聖）属性に強い対抗力を持つカード魔法”闇幕”を張つたがあつさりと貫かれた。

「ぐう！」

あまりの力に身体が傾く…。思つた以上に効いた。

「イキナリ真打ちとはな！」

サーラの持つ槍の先に今度は紅い光が灯つた。

（やな予感！）

”影”がそういうや否や”影”が”シェリー”に、”シェリー”が”影”に位置と姿を変える。

その途端、紅い光が”シェリー”の身体に巻きついた。

「これで決して外れない！”聖なる槍”よ！大魔王を封印せよ！」

サーラが槍を投げ出す！

”シェリー”が”影”を切り離して逃げる。

すぐに”シェリー”を追いかけようとしたが想像以上のダメージを受けているようだ…身体がうまく動かない…くうつ力が抜けていく…。

”影”…マーフィーよ、もしお前が封印されても必ず助け出すぞ…！

シェリーの意識は…闇の中に消えていった。

大魔王シェリー（後書き）

もう一人のオレの名はマーフィーです。
ここまで俺、オレといいあう場面設定のために今まで名前を伏せてきました。

世界を救つた代償（1）（前書き）

すいません。かなり短いです。
なので今日も0時と12時の2回アップします。
以後、元の7時に戻します。

世界を救つた代償（1）

何だか…眠い…なあ…あれ?

額にひやりとしたものを感じて俺は眼を開けてみる…。
と、目の前に女の子の顔がアップで見えた。

見覚えがある…耳をみると猫の耳をしていた。やはり檜の中にいた
女の子だ。

濡れタオルを額においてくれたらしい。

「?????????」

想定していたので驚かないが言葉の意味がわからない。

女の子が何かを言つと笑顔を作つた…耳が垂れる。

猫耳がかわいい。

オレンジ色の髪の毛をした女の子は10歳位か…24歳の俺にとっては守備範囲外だな。

だがあの耳はポイント高い！

触つてみたい！

本能的欲求に逆らえなかつたので、上体を起こして手を伸ばしたが

…手がない？

そんなことはなく、服の中に収まつていただけのようだ。袖をめくつて手を出す…あれ？

手が小さい。目の前の女の子の手と比べても大差はなかつた。
身体をみると、足も靴が脱げズボンに隠れている…。
間違いない…身体が小さくなっている。

世界を救つた代償（2）

どうやら、身体が小さくなってしまったらしい。

年齢で言つと10歳前後か…若返つた？

まあ、転生名物の羞恥プレイ（オムツ替え）を受けるまでにならなかつたからよしとしよう。

気持ちを落ちさせようとして周りを見回す。天気はいい、どこかの池のほとりにいるようだ。匂いが自然の匂いだ。都會育ちの自分には違いがよくわかる。

もう一つ目に入ってきたモノがあつたが…そちらは無視した。
「あれからどうなつたんだろ？もう一人の俺は大丈夫かな？」
そうつぶやくと自分の影が伸びて膨らんだ。

人の形を取ると…もう一人の”オレ”になった。

もう一人のオレは軽く俺に触ると頭に声が聞こえてきた。

（言葉通じないだろ。「触話」のカード渡すからと使ってみな。
そう言うと手を離した。その手にカードが現れる。
握手している絵が描かれている。

そのカードを手に取り心ポケットにいれてみる。

それから、もう一人のオレの手に触れた。

（あー、あー、テス、テス、テス、ただいまマイクのテスト中…聞こえる？）

（…じつちの住人にわからないギャグはやめろよ…最後氣弱になつたう。）

（心からすまみませんえん。…『めん。ほんつとうに』ゴメンなさい。）

（…一瞬、本当に俺の写しかと悲しくなつたぜ。）

（真面目をやうつ。俺は月影光太、”こうた”でいいよ。）

（オレはマーфиーだ、コータ。）

（じゃあ、まず教えてくれる？マーфиーとの子に色々聞きたい

んだけどその前にマーフィーに聞きたい。この子は知ってる?)

(ああ、戦争相手だ…。そこら辺は3人で話した方がいい。)

女の子の方をみると、察がいいのか手を出してきてる…その手を

握った。

(聞こえる?)

(はい…聞こえます。)

(名前教えてくれる? 僕は月影光太、”こうた”でいいよ)

(はい、私はミルフィードです。みんなからはミルって呼ばれてます。コータ様。)

少し震えている…手も…頭に響いてくる声も。

今、右手でマーフィーと、左手でミルと手を繋いでいるかたちだ。

(今のミルの声、マーフィーにも聞こえる?)

(聞こえるぜ。こういう会話は始めてだな、面白い。)

俺はを仲介しての情報交換会が始まった。

世界を救つた代償（3）

今、俺はが「触話」のカードを心ポケットに入れて魔法をかけ、俺の『』のマーフィーと猫耳のミルに触れることで会話が成立している。

（では、…ミルに聞く。さつきの空間で俺とマーフィーが話していたのは聞こえてたんだよな。）

（はい、…聖なる槍は感應鉱物オリハルコンでできているので、心がつながると会話ができるんです。）

（その辺はあとでいいよ。今までの経緯を俺に話してくれないか？俺こっちの世界のこと知らないからわかりやすくな。）

（はい、では、私の素性から。私はファイガードという王国の第2王女です。）

今、私たちの国と大魔王シェリー率いる魔軍とは戦争をしている状態なのです。大魔王シェリーはあまりにも強く最後の手段として私達は”聖なる槍”を召喚することに決めました。

この槍の召喚し扱うには王家の血を引く姫巫女と呼ばれる者が人柱になることが必要で…つまり…それが私です。）

少し苦しそうな顔をした。…ムカツ！こんな小さな女の子を人柱にして…聖なる槍だあ？…。いきなり刺されたもんでも聖なるモノなんて全然思っちゃいなかつたが…。

（人柱になつた私が入つた”聖なる槍”が見事、大魔王を貫き封印しようとしましたときです…槍は、この人が大魔王でないことを見抜きました。）

ミルはマーフィーの方をみた。マーフィーは肩を竦めて呟いた。

（影武者が俺の仕事だつたからね。）

（…見事に欺かれたとしかいえません。）

悔しそうな顔をして、また俺の方を向いた。

（ともかく、槍は中にいた私に非常事態を伝えてきました。封印対象の力が弱すぎてバランスが取れず、強すぎる封印の力がこのままでは暴走してしまうと。…緊急事態を回避する方法を槍は示してきました。…次元を超えて、今貫いている者の「写し」を貫き、その者に暴走する力を流し込むことを。それは槍には容易いことだと。私は急いで確認しました、その者の命には問題はないか？と。槍は問題ないと伝えてきました。）

ちと疑問が… その質問では命さえ無事なら… つてことになんないか？

（本当に申し訳なかつたのですが、その…あの…サクッと刺しました。）

（ブククッ…ストレートだな。）

（笑うとこじやないぞ！）

（はい、…笑い事ではありませんでした。暴走しようとする力を必死になつて制御して、コーダ様に注いでいたです。ですが…）

ミイはまたマーフィーを見て

（また、問題が起こりました。コーダ様の心ポケットにカードを入れた影響で力がコーダ様に入らなくなつてしまつたのです。）

れれれ？

俺がカード魔法使つたせい？でも不可抗力だし、勝手に俺の中にド

クドク力を注ぎ混んでいたみたいだし…俺が悪く思つ必要ないよな?

(しばらぐは、力を暴走させないようにするので精一杯でした。そこにはコーダ様から声がかかったので…。)

(んん?それなら俺に魔法のカードを外すようにいえばよかつたんじゃない?)

(ダメです。槍が言うには、力の入り口がポケットに変わってしまつたと。カードを外してももう戻らないから無駄だと。…それで、また…槍が…。)

(何で言つて来たんだい?)

(本人の許可があれば他に入り口が作れると…強引にですが)。

(…で、あのお願ひだつたわけね?)

(本当に申し訳ありません!色々迷惑をかけて…)

(それもあと!ちなみに俺がなぜ子供になつたのかわかる?)

(それは暴走した力のせいです。あの槍は過去と現在と未来の時間をつなぎ合わせて無限の閉鎖された時間の輪を作り封印となのです。色々と暴走しまくったせいで、過去が強くなつていて…というのが私の槍の中での最後の記憶です。私もあの後氣を失つてしまつて…気がつくとコーダ様と一緒にここにいました。その後、”聖なる槍”がどうなつたかもわかりません。)

うーん、やっぱりそうか…ワカンないんだ…。

(マーフィーもどうなつたか知らない?)

(槍か?知らんよ。なんかの力がコーダに集まつてくる代わりに封印が解けたのがわかつたからコーダの影になつて隠れたんだよ。槍は元のところに戻つたんじゃない?召喚系の武器みたいだし?)

むづ、コツチもトボけているわけではないらしい…。

レノモのスケジュール

世界を救つた報酬

「…」もでで大まかないとほわかった。

あお、大事なことを…一応確認しとこへ。

（でもあ、俺、元の世界にもどれる？元の身体に戻れる？）
マーフィーもミルも困った顔をしてくる。答えを知らないのだらう。

（まあ、そのうち見つかるだろ…。あつそつだミルー…）
（ひやー！）

「…」滝のような汗を流しながらこちをみてくる。このあと俺
がなにを言つてかわかっているのだらう。

（世界つて救われた？）
（…ハイ。）

滝の汗が加速する。

（世界は救つた…その代償として元の世界に戻れそうになにし、身
体も小つちやくなつた…。で、あのときに話した報酬だけど）

ミルが「…」と大きく頷いて、

（…な、なにを望まれますか？）
（…）いつと報酬の約束…さすがオレの『』…しつかりしてゐゼ。オ
レは何にしようかな？）
（マーフィーの茶々は置いとい…）
（ブーブー…独り占めするきか…でもそれもオレらしく…。）

これは無視。結構真面目な場面なんだよ。

(あのときは報酬を払う約束はしていないよな。それに俺、なんでもいいっていったから。

君は報酬を払わなくともいいし、あるいは報酬が「感謝の言葉」でもいいんだぜ。

…ミルは何をくれるかな？くれないかな？）

震えながらもミルははつきり言つた。

（私の願いを聞いてくれて…世界を救つてもうったんです。払います、払させてください！私が払えるものなら何でも…。）

ミルは濁流のように汗を流しながら、じつらに向いてじつかり答えた。
うん、…応えてくれた。

（じゃあ、報酬としてその猫耳触らせてくれ…さつきから触りたくて、ずっとしてたんだ！）

（えっ？…いいですか、それだけですか？…）

ふふふー！OGがでた以上遠慮は無用！早速さわづまくつた。ミルはくすぐつたそうな顔をしている。

（… わすがオレの『』し… 読めなかつた…）

右手は離していなかつたのでマークマークとせまだ「電話」中である。ミルは俺の膝のうえに頭を乗つけて気持ちそつこしてこむ…すると、そのまま寝てしまつた。安心して力尽きたのだね。

(こんな小さな女の子を人柱にして…恥ずかしくないのか。)
(それだけ、大魔王が強すぎて対抗する手段がないってことだろ。
追い込んだ側ではあるが同情するぜ。)

魔族（？）っぽくないことをマーフィー言つた。

…さて、疲れがまたでたのか力が抜けて来た。上体を元に戻して、横になつた…右手は離していない。あと一つやることがある。

（マーフィー…ミルを殺さないでくれ。）

（…さすがオレの写し、よくわかつたな。）

（ミルはマーフィーにとつて不都合なことを知りすぎているからね。
俺が敵の立場なら同情なんてしない…。）

（…保留だな、とりあえずコーダの身の安全が保証されるまで。
封印に失敗している彼女は…戻れば危うい立場だぞ、王家はお前に
もミルにも敵にまわる可能性が高い。）
(…俺も向こうでは…人柱だったんだ。)

意識が遠のいていく…もう限界だ。

（ふつ、3人とも…か）

マーフィーが何かいつたがもうコーダの耳には入らなかつた…。

世界を救つた報酬（後書き）

最初の方に本文で描きましたが、本編の主人公はかなりひねくれています。
今後、ひねくれ度が増すかどうか…見守つていただけるとありがたいです。

「コータの異世界メモと…5年後の大魔王（前書き）

前半は設定集的なものです。

「コータの異世界メモ」…5年後の大魔王

＜「コータの異世界メモ」より抜粋

世界について
お互いに影響し合つた二つの世界がある

俺のいた世界は、こちらの世界の人は「『写しの世界』」という
便宜上俺はこちらの世界を「異世界」ということにする

「写し」の世界のにもう一人の自分がいることをこちらの世界は知
つていい

ただし、なぜ、写しの世界を知ることができたのかは不明
(ミルは知らない、マーフィーは気にしてない)

「写しの世界の自分」は性格は一緒だが、魔法属性は反対
(自分たちしか知らないので推測)

単位について

時間、重さ、長さは、元の世界にと同じ

地理

円系の大地

時計に照らし合わせてみると、
魔軍側が12時から6時まで

人間側が7時から11時まで

中央の山脈には竜が住まつ(不可侵)

国家と宗教と大地・勢力範囲について

人間側

女神アンノルファイ(猫耳)を主神とする王国ファイガード(フ、
8時の大地)

国王はスカルクはミルの父親

男神ハウカッター（犬耳）を主神とする帝国カタカタ（10、11時の大**地**）

自由都市国家群ビックチャイルド

帝国と王国の間にある（9時の大**地**）

魔軍側

魔王5 国家がある

大魔王シェリー（3、4の大**地**）

1魔王（2時の大**地**）

2魔王（12、1時の大**地**）

3魔王（5、6時の大**地**）
マーフイー

4魔王

マーフイーは魔王になりたて（本人曰くペーぺー）
マーフイーの領地（国）はシェリーが管理している
シェリーの”影武者”をしているため…らしい
マーフイーはこれ以上教えられないという
ちなみにこれはミルには知られていない

言語

王国：コネ語

帝国：ヌーイ語

主に自由都市・共通語

魔軍：暗黒共通語

魔法について

色々と種類があるらしい

魔力を消費することで発動する

「カード魔法」はその中でも特殊な存在らしい

「カード魔法」は心ポケットにカードを入れて使う

心ポケットに入れれば使えるし、発動に時間がかかるないので便利
ただし、使用できる（消費できる）魔力がないと心ポケットに入れ
ること自体ができない

ミルとマーフィーの知る限り2枚以上入れることができた者はいない
(この情報は秘匿する必要があるかもしない)

魔法には4つの属性がある

扱う者にも属性がある

無ノーマル、精霊、光（聖）、闇（魔）

光（聖）と闇（魔）は反発する

戦争

12時の針の位置で帝国と2魔王とが戦争中

7時の針の位置で王国と3魔王・大魔王連合軍とが戦争中

最大のポイント

女神アンノルファイ（猫耳）に愛でられた者は猫耳に、男神ハウカ
ッター（犬耳）に愛でられた者は犬耳になる！
犬耳みたい！

コポコポ…

薄暗い空間の中、水が管の中を流れる音だけが響く…。

そこには直径3m程のガラスのようなものでできた球体が台座に設
置されており中は薄い朱色の液体で満たされている。
管が一本接続されており一方から新しい液体が入る音、もう一方か
ら液体が出る音、この空間の音の源はそれだけ…。

その中には美しい女性が入っていた…白に近い金髪に灰色の瞳をし
ている。

この女性の瞼は薄く開いているが、夢でも見ているのか…意識は存在していないように見える…。

球体の前にはその女性をじっと見つめる男が佇んでいた。その指には怪しく光る指輪がはめられている…球体の中の女性も同じものをしている。

ギギギ…と重い音がして、男の背後にある大きな扉が開き…何かが入って来て男の後ろで止まった。

「首尾は？」

男は振り返ることもなく問う。

「はっ、例の副官を倒してまいりました。」

「王国の方は条件を飲んだか？」

「想定通り…6の大地を渡すことで停戦協定が成立しました…」

「…ならば、当面の対応は他の魔王達となるか。」

「時間稼ぎの方は抜かりなく行つております…。」

「5年はことを構えないように…任せたぞ…。」

「仰せのままに…それでは失礼いたします…5年後の大魔王様。」

それが、背後の扉を閉めて出て行つたあとも…男は飽きることなくじつとその女性を見つめていた…。

魔法を使ってみよー!-2

「一ヤツ、一ヤツ！」

今日は俺がこちらの世界に来てから3日目になる。
今はカード魔法を練習しているところだ。

先ほどから、ミルは小石を持った手をいつでも投げられるように構えながらフィントをかけてきている。この投げられる小石を防御するものがこの訓練のテーマだ。一瞬で、反射的に、展開するのだ。

「一ヤツ…」

(聖幕！)

投げられたその小石を一瞬で弾く！

「いい一ヤツ！」

ミルは戦闘中にはなぜか語尾に「一ヤツ！」が付く。

ちなみに「いい」の部分はさつき教えてもらつたばかり…言葉の壁は結構感じるが、「触話」のカード魔法のおかげでコリコリケーシヨンに不足はない。

「次いく一ヤツ！」

「おう！」

また、聖幕の魔法を解いてまた構える。

24歳から10歳くらいになつた俺の身体能力的なハンディは大きい。まずは、防御を覚えるようにマーフィーに指示された。

これは「写し」である俺が死ぬことがあればマーフィーも死んでしまうから必然である。今のところ俺はマーフィーのアキレス腱なのである。

ちなみに今いるところは7時の大地の中央山脈のようだ王国内にいるようである。もう使われていないらしい山小屋を借りている。ミルの説明では「聖幕」の魔法カードはかなり高い防御能力を秘めているらしい。子供の頭くらいの大きさの石を投げつけられても平気だった。

ミルは小石を持った手を震わせて投げるフェイントをかけて…逆の手でパンチを見舞つてきた。速い！見えなかつた！聖幕は3発入つたことを伝えてきた。同じくらいの年に見えるのにミルはどうやら強いらしい…俺弱すぎだよ。

だが、「聖幕」の魔法カードは本当に強力だ！今のパンチも中にはダメージを与えていない。

「ならば、こうニヤツ！」

消えた！ミルの速さに全くついていけない…背中に攻撃を食らつた…両手の指の先が輝いている…それでひつかれたらしい…が、効かないぜ。

「クッ！これならビリーニャツ！！」

また消えた！が今度は影がチラリと自分の身体にかかつたのを見逃さない、上だ！

「回転爪突進！」

ミルが頭上から回転しながら突つ込んでくる…いいだらう…バトラーの血が燃えてきたぜ！ゲームだけどね…。

聖幕の衝突予想地点の摩擦抵抗を弱めてふんわり受け止める、そのまま摩擦抵抗を高めて聖幕をミルの身体に触れさせ巻き取らせるとして回転を止める。

「受け止められた？！」

ちなみにこの辺のミルの言葉は俺の勝手な解釈です…。

ともかく、今度は「コツチの番！」気に幕をピンと張る…

「さや…」

弾き飛ばされて悲鳴をあげるものの猫のような身のこなしで着地する。

「フシュー…フシュー…」

…これつて興奮した猫みたい（笑）。説得は無理だな…あつそつか言葉通じないんだつけ。

まあいい…やつてやるう…某拳闘マンガ直伝…読んだだけだけど

…フリツカージャブ…！

聖幕の一部を拳にみたててミルに繰り出す。

パンと音がして…ミルが倒れた。

…あれ？…やり過ぎた？

「ミル！」

近寄つて揺り動かすが目覚めない…頬が赤い、どうも皿を回しているらしい。

とにかく濡れタオルでも用意しよう…少し離れた気の枝にタオルをかけて置いたのを取る…。れれ？

聖幕の一部がタオルをつかんで…タオルが宙を浮いてきたように見える。

聖幕はこいつらの意思に反応するらしい。

試しにナイフをイメージして枝を切つてみた。

ずしゃーんと…木が倒れた。幹まで切つてしまつたらしい…。

「聖幕は防護の魔法で…ない？」

結構使える…これ！

…はつ、ミルのほうへ冷やせなきやだった！

「一タが元の世界の「じぶん」ではない理由（前編）

ひとつあります。

「一タが元の世界のことを話さない理由

訓練のあと、近くにある池のほとりで俺とミルは2人して休息を取ることにした。マーフィーはない。マーフィーは俺達の食料を確保した後、戦争の状況を確認しに行つている。そのときに一つお使いを頼んだが、状況によつてはそれが許されないかもしれない。俺は聖幕を使ってタオルを池の水に漬けてから絞りミルに渡した。よつするに「おしほり」だ。

「（聖幕のカードでこんなことができるなんて知りませんでした…。）」

ミルは言葉を発生しながら、つないだ片手から「触話」による会話を同時にしている。

聖幕は本当に便利で防御だけでなく攻撃にも使える。それに使つてみると案外細かい作業もできることがわかつた。

（何で今まで気づかれなかつたんだろう？）

俺にはまだ会話は難しいので「触話」で言葉を伝える。

「（多分、消費魔力の多さだと思つ…ちょっととかしてくれます？）」

心ポケットからカードを出してミルに渡した。
ミルも光（聖）属性らしい。

「（聖幕…）」

ミルが聖幕を使うと、ちょっとピンクがかかつた幕が見えた。 「一

夕の聖幕は無色…色の違ちは性格が影響しているかもしれないなと推測する。

「（1、2、3、…限界！）」

ミルの魔力では3秒しか持たないらしい。ミルは険しい顔でカードをみながらカードを返してくれた。

「（私も王族ですので、子供でもそれなりに多い方なのですが…）コータ様は魔力が桁外れに多いようですね。これでは防御しか考えつかないのでしょうか？、それに結構レアなカードと聞いていますし。）」

なるほど、消費魔力が多くて使用時間が短いし、数が少ないので解説が進んでいないということか。

（ありがとうございます。それよりミル、敬語やめりよ。おんなじ子供なんだし。）

ちょっと笑いながらそう言つと、ミルも笑つて言い返してきた。

「（ですが、）コータ様は24歳ですよね。あつ、槍の解析機能で勝手に情報が頭に入ってきてたんですね。）」

年齢を正確に知っていた。一体どこまで情報が漏れたのか？怖くなるな。

（それでも王女様だら、もっと俺にえらべりしててもいいんだぜ。）

そう言つと、ミルは急に真剣な顔になつて俺の目を見つめにきた。
ミルは年齢的に守備範囲外ではあるが猫耳だし可愛い。

「（「一タ様の世界にも…王様とかいるのですか？）」

（俺のいた国は王政は崩壊してゐるけど、いないわけでもない。まあ、一応全員身分は平等つてことになつてゐるよ、そういう国がこつちにあるつて聞いたけど？）

「（自由都市国家群のなかにあると聞いたことがあります…。）

ん？なんか別のことを感じにしているっぽいな？

（俺の世界のこと、知りたい？）

「（あの…「一タ様があまり向こうのことを話されないので…私を気遣つてくれてこられるですか？向こうで未練とかおありでしうに…。）」

ちょっと目が潤んでこむ…どうやら俺が氣を使つていて勘違いしているらしい。確かにミルからすれば俺は巻き込まれたかたちになり、ミルが張本人と言えるだろう。この辺り俺の解釈は少し違うが…これはしっかり話しておいた方がいいだろう。

（ミルに氣を使つてゐるわけじゃないよ。向こうに未練はないよ。）

未練とか全然ないといえば嘘になるが、…この子には嘘をつけたい。

「（「めんなれ…。）」

ミルの目からポロポロと涙がこぼれる。うーん、仕方が無い…話すとするか。

(ミルには感謝している。)

「（へ？）」

（「こちらの世界に連れてきてくれてありがとう。…少し俺のこと聞いてもらえないか？」）

ミルが泣きながらこくんと頷いた。

俺、月影光太は普通の家に生まれた。裕福とは言えなかつたが、兄弟も多いし賑やかな家族だつたと思う。それが10歳のときに引越ししてから変わつてしまつた。父の兄が子供を残さずに亡くなつてしまい、父が実家を継ぐことになつたため実家に引っ越したのだ。元々父は継ぐ気がなかつたし、父の両親も若い頃から父を自由にさせていたらしい。それが継ぐことが決まつてから格式を重んじる祖父母に色々言われまくつたらしい、兄に比べて要領が悪いとかなんとか…。それで父は家にあまり帰つてこなくなつた…。そんな父の代わりに祖父母の祖先は母に向かつた。母は一生懸命堪えてやつていたけど、とうとう身体を壊してしまつた。母は母の実家に帰つて病気療養することになつたのだが、男子は連れていかないように祖父母に求められた。俺と3歳の弟に残るようにと。このとき離婚も絡んで色々とあつたらしいが…。

俺はみんなが幸せになれる方法を考えた。祖父母と、母は少しの間は離れていた方がいい、そうすればまたみんなで楽しく暮らしたくなるはずだと。弟はママラブ真っ最中だ、だから俺は皆に自分が残るといつた。そして祖父母のいうことをなんでも聞く代わり弟を連れていくことを認めさせた。

俺の俺なりに考えた末の言動であつたが俺は甘かつたらしい。結局、母は兄弟は実家に帰つてこなかつた…いつになつても…。

それでもいつもと通りになると頑張つた…祖父母のいう通りの学校に行き、成績もそれなりにいい、優等生をしていた。

祖父母は満足してくれていたし、俺の説得もあつて父との和解も進

んでいた。もう少しでまた皆で暮らせると思った。そんなとき…、大学に入つてしまはらくして祖父が急に亡くなつた。ショックだつたのか祖母はその後一気に痴呆が進んで施設にはいることになつた。何も解決しないまま…父と母と兄弟は戻つてきた。

みんながごめんよと、もうお前だけに苦労はさせないといつてくれた。嬉しかつたし、俺の行動はみんなを幸せにしたと思つた。やつと家族一緒になつたが、本当に苦しかつたのはここからだつた…。心が一緒に生活することを拒んでしまつたのだ。

いつも俺の心には、今までなぜ助けてくれなかつたのかという思いが渦巻いてい…。笑いあつて…いるはずの家族の笑顔を見るのがとても嫌になつた…。精神科医にきくと精神的なストレスから心が疲れ果てているのだと。俺が作り上げた幸福な家族…その幸福な家族…という存在が一番俺を苦しめるのだと…。

結局、俺は大学を卒業したあと一人暮らしをはじめた。

(だから、元の世界に帰ることは俺にとつて苦しみしか生み出さない。せつかくだし、ここでーから始めてみよつと思つんだ。)

10歳の子供相手に話す内容ではなかつたかもしれないが、ミルはずつと真剣に聞いてくれた。なぜか心が軽くなるのが感じられた。

「（まるで人柱…。）」

（ミルに比べればそんなたいしたもんでもないよ。）

俺は最近気がついたことがある。俺は家族の愛を今ではなく過去にこそ受けたかったのだと、同じ愛でも、ときが…必要なときがあるのだと。

こちりに来てやる」とのない俺は心のなかでひとつ決めたことがある。

ミルを元の状態に戻すことを。

ミルは…まだ間に合ひ。

ミルから聞く分には、みんながミルを大切に思つてゐるらしい。

「（私…力になりま…なるよ…「一タ。）」

何かを心に決めたよ」ミルがタメ口を聞いてくれた。

（ありがと、でもミルは小さいから無理なことしなくていいぜ。）

「（背は私の方が大きいわよ…ふふ。）」

軽口を叩ける相手が…冗談を言い合える仲間が、どうも俺にも見つかつたようだ。

帰つてきたらもう一人の俺に”ダチ”を紹介してやろう。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑つた口（一）

マーフィーが語ります。

早朝の冷えた空気のなかをオレは飛んでいた。魔力を使いながらも、「魔法」に頼らず何か行使する能力…スキルと呼ばれるものがある。飛翔のスキルは魔人として生を受けたマーフィーが生まれつき持ったスキルである。

しかし、今日は違和感を感じるほど制御が難しかった。心が乱れている…。早くもう一人の俺、コーダの無事を確認したかった…。それでも抜かりなく後を追うものがいないか確認しながら、もしいたとしても方向を掴ませないように大きく回り込んで飛んで来た。おそらく大丈夫だろう。

コーダ達のいる山小屋を見つけ近くで降りる。一応警戒をしながら接近する。すると、扉が空いてコーダが出て來た。手を振っている。こちらに気がついているようだ。

「おかいえ…ひ。」
「おかえり、だろ。」

流石に10日程度では会話は無理か。

だが、それよりも気にかかることがある。コーダの雰囲気が変わっていた。そして何故オレが帰つて來たことに気がついたのか。

「触話…前…触診…してくれなさい…。」

「触話で会話する前に触診でコーダを確認しうつてことだな。」

コーダは笑いながら頷いた。

俺の警戒する心を読んだらしい。オレはカード魔法「触診」を心ポ

ケットに入れてから、もう一人の俺である「与」のコータの身体に手を触れた。ステータスを確認する。
子供のため、身体的ステータスは情けないほどに低い…敏捷度がちよつとだけアップしていたが。身体も、精神もステータスは異常を示していない。誰かに操られたりしてはいないうだ。

ん?

「カード魔法の聖幕が発動中?」

コータが足元を指で指した。魔力を見る」とのできる力を持つオレは「コータの足首に輪のように巻きついている無色透明な聖幕を感じた。そしてそこから数本の糸のようなものが出ている…幕の一部を糸のように細くしているという事か?。これをあちらこちらに張つてあるから…近づく者に気つくことができるということわけか。なんという器用さだ!

とりあえず確認ができたので手をつなぐ。

(あー、恥ずかしいな発音のミスつて…。)

(「コータ、…霧囲気が変わったな。それに聖幕のこれはミルに教わったのか?」)

(まあ、心のモヤモヤがすつきつしてな…聖幕の応用については後で話すよ。それよりマーフィーは…俺の軽口に付き合えないくらい余裕がないな。)

確かに今のオレに余裕などない。途方に暮れていると言つた方がいい…。

(最悪の想定を上回つたつて感じだな、…この場合は下回ると言つべきか?)
(どつちでもいいが、…図星だよ。)

(話してくれ…。もう一人のオレがそこまで心配する事を。)

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑つた口(2)（前書き）

この作品をみて頂いただけでなく、評価をつけてくださった方がいました。

本当にありがとうございます。

作者は幸せ者です。

今回の話は（3）番であり、マーフィーを幸せにしたいなと思つてます。

魔族の幸せって…難しいですね。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑つた日（2）

引き続きマーフィーが語ります。

何がそうさせたのか…今のコータが大きく見える…力では仮にも魔王である自分に叶うべきもないはずだ…が、こいつとは戦いたくないと思つた。

（まず、状況報告だ。あの日、魔王が封印されたという話が敵味方に伝わり魔軍は崩壊。翌日に停戦の申し立てを3魔王が王国側に打診し、王国もそれを受けてその翌々日には停戦合意に至つた。）

ここまででは自分の予想を超えていない。

（そして各状況だが、王国は6の大地を譲渡されたらしい。本当はお金を巻き上げたかつたようだが上手くかわされたようだ…。しかも魔軍のモンスターの敗走経路は5の大地に向けたものではなく7の大地に向けてだ。これは意図的にだろう。王国は6の大地の管理についてと、国内に侵入されたモンスターなどを相手にしばらくは戦争どころではないだろう。王都で勝利の凱旋パレードくらいはしていたが。）

（魔軍のほうは？）

（コッチは様子がおかしい。ショリーがいないんだ。魔大王は行方不明となつてている。確かに聖なる槍が封印したことろを誰もみていないだろうが。）

（うーん、マーフィーが大魔王の影武者であることを事を知つている人物は少ないでいいってたよな？）

（オレとシェリーを除くと2人、3魔王のケンプと、大魔王の副官テスだけだ…。）

「一タは少し考え込んだ…。そして

（聖なる槍の攻撃でシェリーが死んだ可能性は？）

（ないな、確かに大ダメージを受けてはいたが致死ではないはずだ。）

（シェリーが何かされたとしたら、2人のうちどちらを疑う？）

（テスはこういうケースでは傷付いた大魔王を回収し安全の確保、オレが時間を稼ぐつてことになっていた…。3魔王のケンプは…シェリーの恋人だ…どちらも今どこにいるかわからない。まあ、疑うなら…。）

心のなかでそれを言つのは嫉妬のせいだとストップがかかる。

（大魔王シェリーはケンプのところだな。1人で身を隠していると
いう選択肢もあるが…）

（あいつはやられたらやり返すぞ。たとえ瀕死の傷を負わされたとしても隠れたりはしない！それにケンプにやられるほどヤワじやない！）

（なら…、ケンプに一杯食わされたんだる。彼女は相当深いダメージを負つていたみたいだし…副官は葬られたんだろうな、多分。）

「一タは何故、ここまでつきり言えるのか？俺のその疑問に…言葉には出していないのにまるで聞いていたかの様に…」「一タは答えた。

（停戦が4日で合意？アッサリ6の大地を譲渡？明らかに用意しましたつて感じだな。これは王国側にも内通者がいるな…。もしかしたら聖なる槍の召喚自体…用意されたものなのかもしねない。）（なんだって…）

（上手くすれば大魔王を、失敗しても”影武者”の魔王マーフィーを封印できると踏んだんじゃないのか？）

（だが、やつはシェリーに惚れている。失いたくないはずだ。）

（封印だ、死ぬわけではない。それに今も殺さずに幽閉しているに違いない。）

（全てお前の推測だらけ…こちらのことによく知らないから知っている範囲で答えを出そつとしている…危険だ。）

コータは触話のために握っている手に力をいれて来た。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑つた口（3）

引き続きマーフィーが語ります。

コーダは握つている手に力をいれて来て…俺が思つても見なかつた事を言つ出した。

（…もしマーフィーがこの世界で大きな事をやれるとしたら、どんなことをしてみたい？）

（なんだよ急に…まあ、俺も魔王のはじくれだし、世界征服くらいはしたいと思つ。）

（…ひつちや…）

（な…ちつちや…ってなんだよ…）

（俺ならば、恒久平和くらいは言つぜ…）

（ふん！人間らしいと言つか…お前の世界はそうなのか？お前はそれのやり方を知つているとでも言つのか！）

（俺の世界だつてそんなもんないよ。それに、そんな世界の作り方があつたらいらない、…そんな既製品いらないよ。）

（なら…）

（なあマーフィー！お前に俺の異世界の知識を全部くれてやるよ。その代わりにお前の全てを俺にくれないか？）

（こいつはオレが…オレが考へていたセリフを言いやがつた。

（何がお前をそこまでさせる？させる気になつた！）

（ミルを元の場所に戻してやりたいんだ…家族の元に。ただそうなると成り行きでその位を目標にした方がいいと思つてね…だから世界征服くらいはサクッと行こうぜ。）

「このとおり……」の言葉が頭から背筋を貫いて足先まで痺れさせた。

… そうだ、この感触… 思い出した… これがオレだ！ オレの真の姿だ
！ 久しく忘れていた…。

「一タよ、まさしくお前はオレの『』』だ！」

(ならお前も...魔王を召乗れよ...オレの「写し」だろー)

(やだよ…イロイロ被りそうじゃん!…他になんかいいのない?)
(確かに…大魔王含めると5人も魔王いるしな…うーん、いつその

（俺、宗教苦手なんだよ！…まあもう少し後にしよつ、それ考える

(やうだな、何もしてないのにそんなこといつてもしようがなによ
なーはははははははー！)

心から笑つたのはいつ以来か？久しぶりに…体が勝手に踊り出したくなるほど愉快になつた。

これから「コータはもつとオレを愉快にさせてくれるだらう。オレもコータを楽しませなれば！」

そうでなければ……置いていかれそうだな。

契約…魔王マーフィーが久しぶりに笑つた口（۳）（後書き）

うーん…大きいこと書いちゃつた（汗）。

これからフォローが大変そう（泣）。

作者はウツカリハ兵衛の転生者なので、変なところがありましたら
ご指摘くださいね。

突入！ファイガード城（1）

停戦から10日程すぎた頃、王都ファイガードの様子は沈静化しつつも、大魔王シェリーの封印と停戦に湧いた歓喜の空気と、人柱となつたミルフィーユ姫を失つたことを悲しむ空気が混在していた。また、モンスターなどが多く国内に入つた事もあり国民に大きな安全感はない。

夜8時をすぎた頃、王城近くにたたずむ3人の人影があつた。その内2人は子供なのかもう一人に比べるとかなり身体が小さく感じる。

「…うん、今からがいいと思う。」

「…そうだな、これ以上待つてもしょうがないだろ。」

背の高い男と、女の子が同時に声をあげた。これは真ん中に立つている男の子が「触話」の魔法カードを使って2人に同時に言葉を投げたために起こつた事ではたからみると奇妙に見えた。

一瞬、3人で見つめあつて笑い合う。

男の子が女の子の方を向いた。

「…うん、頑張るわ！」

男の子から何かメッセージを受けとつたのか女の子は小さなガッツポーズを作つた。

「よし、じゃあ入れ…しつかり用意してくれよ、悲劇のプリンセス様。」

背の大きな男が両手を広げた。すると2人の子供の姿が搔き消えた

…。

「派手に行いくか…。」

そう言つて、その男の姿は闇夜に消えてしまった…。

突入！ファイガード城（2）

ミル（ミルフィー）が語ります。

「ふははははははーあーはっはっはー」

マーフィーがあげた笑い声が王城内にこだまする。ここは王城の中、私がよく知っている場所なの。

私の話から入りやすいところをとおつてお城のなかに入るとマーフィーはワザと姿を見せたの、大魔王シェリーの格好で！

そして目的の謁見の間まで向っている真っ最中。この時間、謁見の間の近くで王…お父様は仕事をしている事が多い。それに何かあつたらそこに兵を引き連れて防御に当たると聞いた事があつたからなの。

「まつ魔王だ！大魔王シェリーだ！」

「衛兵！集まれー！うあああつ！」

マーフィーが黒い何かをあちこちに打ちまくっている。

（火炎系のほうが見栄えがするんだがなあ…ダメか？）

「（ヤメテーーー）」

思わず声を出して叫んでしまった。

（却下だ！もつと手加減しろ！死人を出したら元も子もないんだからな！）

（めんべー…。）

今、私と「コータはマーフィーのなかにいる。マーフィーの持つ「影懐」という特殊スキルが作り出した空間?にいるのだけど、あんまり気持ち良くないの、ココ。でもマーフィーの視覚を通して周りを見る事ができるのはとっても便利ね。

マーフィーの攻撃で自分の見知った場所が吹き飛ぶのを悲しい思いで見届ける…うん、…全て私のためなのだから。

(ここの先、約50人、強いのがいる、力、魔力、色々だ!)

「コータは本当にすごい!」「聖幕」と「触診」のカード魔法を同時に使って感知系の魔法を作り上げた。「センサーダッシュ」と言つていてが驚く程遠くのものまで情報をつかむ事ができた…この人には驚かされてばかりだな…コータといふと胸がワクワクする。

コータは世界を救つたというのに全く報酬を求めてこなかつた…私が子供だったからかしら?

それだけじゃない!私を家族の元へ戻すためにこんな危険な事もしてくれる。感謝しきれない存在だ…とても魔王の「与し」とは思えない。

(団体さんか!…どうする!必殺技使うか?)

(GOだ!必殺技使え!時間がかかりすぎた!)

(2人とも必殺技つて言うのヤメテー!)

やっぱりコータは魔王の「与し」でした(泣)。そう…私が”必殺技”なの!

(出すぞ…)

マーフィーの中から出された私の体を、マーフィーは左手から植物

のシタのようなものを出して絡め十字架に張り付けられた様な状態にする。

「攻撃したければやつてみるー!! ミルフィー、魔王女が死ぬ事になるがなー! ウワハハハハハハ！」

「ミルフィー、ユ姫！ 生きておられたか！」

「姫巫女様！」

「な、なんとこいつことをー！」

「姫を盾に！」

「人でなしめー！」

「オニー！ アクマー！」

私が盾にされたので皆が攻撃をためらひ。マーフィーはその間に彼らの頭上を飛び越した。

因みに、通り過ぎるときにはいくつか攻撃がマーフィーに向いたが全てがコータの聖幕に防がれる。今、聖幕はコータのイメージ（？）とこのもので黒く染まっている。「闇幕」という「聖幕」と対をなす闇（魔）属性の防御魔法を偽装しているつて。

（ヤツパリこれだぜ、魔王っぽくてキモチイーーよしつーあそこの大扉だなー突つ込むぜー！）

（バカ！ まだ中を感知出来て…）

コータの突つ込み発言が言い終わる前に中に謁見の間に突入してしまった…。

かなり多くの人がいた、…手や武器を輝かせた人達が。その人達が一斉にこちらを向いた！ 私に向けて魔術を放とうとしていたの！ ひやー！

（やべー…）

(ミルを中心へ!)

「打てーー！」

私がマーフィーの中に引っ込んだ瞬間、爆風に空間が揺れた。冷や汗がだくだく流れる。

「ダイジヨーベ」

まだあまりしゃべれないコータは、多分「大丈夫」と言おうとしたのかな? コータの両手が…聖幕の起点で…忙しく点滅している。一応、かなりの攻撃に耐えられると聞いていたけれど…怖かつたの…コータをみて安心成分を補給! うん、もう大丈夫!

(ミルとの訓練のおかげで、反射スピードが上がつてよかつた。いくら「聖幕」が2枚あっても展開に時間がかかるし、タイミングが難しいんだ。)

コータはマーフィーに色々なカード魔法を集めてもらつている。その中にもう一枚「聖幕」があり、コータは心ポケットに2枚「聖幕」を入れている。これを一枚づつ連続で貼り続けることで、途切れることのない防御を行うつて言つてたの。

「小石投げつけの訓練」のことを褒めてくれたのは私を励ますためにいつてくれたのかしら?

攻撃が一旦止んだ…どよめきがその場を支配する。

「そんな!」

「あれを食らつて…やはり本物なのか?
化け物め!」

(マジでビビった…)

(マーフィー！必殺技を出して余裕の顔！ミル……ここからだぞ！)

だから必殺技いうのヤメテー！

でもコータのいうとおりここからが本番！

茶番が始まる…私とコータの人生を決める茶番なの！

突入！ファイガード城（2）（後書き）

マーフィー：俺の人生は？

ミル：コーダに含まれてるけど？

コーダ：マーフィーのものは俺のもの、俺のものも俺のもの。

マーフィー：くう！さすがは…オレの^{申し}！

ミル：じゃあ、ミルの人生もコーダのものだから、コーダの人生も

マーフィーの人生もミルのものなのニヤ！

2人：負けた…。

「どの罪は誰のもの？」

ミルが語ります。

「なかなかの歓迎ありがとうー危うく土産をふいにするといひだつたがな！」

碟にされた私をよく見える様にするためか、マーフィーが作つたらしい小さな光の玉が頭の上に浮かんだ。

「ミルーああー生きていたのねー！」

王妃…お母様が飛び出しそうになつて周りの者に抑えられる。自然と嬉し涙が出てきた。

「お母様ー！」

「改めて名乗るつー・シェリーだー・国王はいるかな？」

「ここだー！大魔王ー！」

大勢の中から一人の男が歩み出した。見るからに王様といつ格好ではあるけど…

（あれはグレン叔父様よ。）

（本物はどこ？）

（…よくわからない、見える範囲にいないみたい…。）

（それはないなー！マーフィーー！いぶり出せー！）

私を戒めるマーフィーのシタの様なものがいばらに変わったのー！い

つたーい！小さく悲鳴をあげてしまった…。

「影武者に用はない。いないなら土産は持ち帰るとするか？それともここで…」

「やめて！娘の代わりに私を！」

「…よせ！娘を離せ！」

前に出ようとするお母様を制し、グレン叔父様の近くにいた若い兵士が叔父様の前に立つた。その姿が変わり王の…私の知っているお父様の姿になつた。

…ここから「一タの考えたみんなに罪の意識を植えつけちゃうよ作戦が始まつた。

「娘を人質に、何を要求するつもりだ。」

「人質？聖なる槍の人柱として生贊に捧げられたこの娘に、そんな価値が残つてているのか？」

大魔王シェリーの女性ではあるがよく通る力強い声があたりに響くと一斉に静かになつた。誰も声をださない…もしそうしたら自分に罪がのしかかってくるとでも思つてているのだろうか？…出せないみたい。

「人柱にしたからこそだ！その子には生きる価値がある。」

「封印に失敗してここに無様な姿を晒しているのだぞ…それでもか？」

「その子には何も罪はない！あるとすれば人柱を命じた私にこそあらー！」

まるでこの場にお父様と大魔王しかいないかの様に静かだった…。お父様と大魔王の視線が真正面からぶつかり合つている。

(まだだ、もう少し時間を稼げ!…)

「コータと私は今、ある作業をしてる…。この芝居をする」とだけでも私はイッパイイッパイなのに、コータは…私のためにさり気ないことをしているの。

「王よ、お前に罪があると言つたな？本当にお前だけか？」

そこでシェリーはゆっくりと周りを見回した…多くの者が目をそむける。

「違うであろう…」の娘を人柱として生贊に捧げたのはお前たち全員である？違うと言える者がいるのか？命がけでこの娘を人柱にすることを阻止しようとした者がいるか？」

静かで、重い空気がこの場を支配している…うん、私の番なの！

「みんな反対してくれました！私は、私は誰にも強要されていません！私が自分で手を上げたの！だから誰も悪くないの…くつくつ…」

マーフィーがまた締め付けを強くした、ホントにイタタタタタ！

「健気だな…小娘。自分を見捨てた者達をかばうなど…お前がこの者達を恨んでも誰も文句は言わないぞ…一言くらい言つてやれ…一緒に封印してくれる人はいませんでしたか？ってな…うはははははは！」

話し方がオヤジっぽいの…偽物つてばれないかな？そんなことをマーフィーがしゃべってる間に私とコータは作業を進めていく。

(よしひ、もういいぞ！ファイナーレだ！)

「というわけで…、この娘はお前たちの罪の証明、罪そのものだ！王よ、一つ試練を『えよつ…この娘を私が生きて返せばお前たちはこの娘が生きている限り罪を忘れることがきまい…それに耐えられるか？耐えられなければ今、私が代わりに命を奪つてあげよつ…どうだ？』

「人間を舐めるな！娘の命を奪つといつなら刺し違えても貴様を倒す！」

一気に場内に戦いの緊張感が膨れ上がったの。私も冷や汗がダクダクなの…。

「…その言葉試してみようぞ。」

マーフィーがゆっくりと私を…お父様の方へ…いばらで宙吊りのまま…お父様の目の前で…はりりと戒めが解かれた。

「ミルー…」

「お母様…うあああああん！」

直ぐにお母様が抱きしめてくれた！人垣が幾重にも巻かれマーフィーの姿はもう見えない。

因みにここからはひたすらなくように言われているの…コーラタに言われたから…でも、芝居の必要はなかつたの…

お母様の香りが、私の知つているお母様の温もりが、一度と触れ合うことのないと思っていた暖かさに…心から泣いたの…。

魔王のはかり」と

あれからう日。王都は活気がみなぎっていた…王女ミルフィーユが生還したことを国民は祝福してくれたのである。

数日後には帰還を祝つてお祭りを催すという…ミルフィーユが国民に愛されていたのか、王の統治が国民に認められているのか、街中でも封印失敗の否定的な発言を聞かない。

今、俺はカフェで人待ちである…来ないかもしれないが。ふつと影が重たくなる…マークィーが戻ってきたのだろう。

(どうだつた?)

(ちゃんとミルはお城にいたぜ…それにもうすぐ来る。)

洒落ていて居心地の良いカフェは、以前行つたヨーロッパのお店に近い。日本のカフェよりも少しオープンでレトロな雰囲気だ。そこに一人の男性が入ってきた。カウンター席にいるコーダの方へまっすぐ向かつてくる。

「? ? ? ? ? ? ?

おそらく、隣いいか?とでも言つたのだろう。日本人特有(?)の曖昧な笑みで誤魔化し、右横の席を手のひらでさして「どうぞ」と意思を伝える。

男性はウェイターに何かを注文してから座つた。

カウンター席なので自然と自分の右手と、男性の左手のが触れ合つ。これでカード魔法の「触話」が使える。

(コーダ…君じやな?)

(はい、王様。来てくれてありがとうございます。)

顔は覚えている、謁見の間でみたから…ミルの父親で王様である。正直来ないか使いの者が来ると思ったが…よかつた。

(礼には及ばんよ。話は全てミルから聞いた。…娘をありがとう。(きつと忙しいですよね、まずこれを…。)

1枚のメモを渡した。

(ミルが言っていた不穏分子のリストだな。3魔王とのつながりのありそうな…)

そう、謁見の間でセンサーダッシュを駆使してあの場にいる全員の様子を探つたのだ、動きがおかしいものを俺が示し、ミルに名前の確認をとつてから後でマーフィーには文字にしてもらつたものだ。大魔王とミルが現れたのは恐らく3魔王と通じている者にとつて衝撃的だつたらう、ステータスの精神面にかなりの変動が見られた…。これもミルのため…ミルのためにも憂^{うれい}を残すつもりはない…。

(ミルは元どおりの生活に戻れますか?)

(全く同じというわけにはいかないが…眞が優しくしてくれて…大切に思つているから大丈夫じゃ。)

なんとなく口^{くち}もつてるあたり…大丈夫かな?

でももうこれ以上今ミルにして上げられることはない…あとは家族に任せよひ、うん。

(では、これで。)

(まつ、待て!それだけか?ここに呼んだのはなぜ?)

(あんまり意味はないんですけど…ミルのことを大切にしてくれるなら

「…おで来てくれるかなつて…試したみたいで」「あなたさー。」

王様だけを呼び出したのは…ミルの顔をみたら別れを言えなくなるかもしれないから。

(「…王様…お前は…おもつりか?」)

(マーフィーもシヒリーのことを気にしている…)

(ミルの気持ちか?)

うーん…ミルの父親に…こんなこと言われるって思わなかつたな…逆に「娘に近づくな」へりこ言わると思つたのに…。

(ミルを幸せにしてやつてくれだせ…)

席を立つて手を話す瞬間…触話の効果で言葉が飛び込んで来た。

(や…逃がさないの…や…)

ビクッとして席の男性を…王を見ると…服だけ残して姿が消えた…上で音がする。聖幕でガードすると天井を蹴つて勢いをつけたミルが降つて来た!爪攻撃で物凄い衝撃を受ける…

「ミル…」

(マーフィー!何故?城にいるんじゃなかつたのか?)

(ケツケツケツ…いたよ~、王様に化けてここに向かつたのを見たけどな。嘘は言つてないぜ。)

(「の裏切り者~!」)

(「…王様は裏切り者なのにやーーー」)

聖幕越しにミルの思念が聞こえた。こんなことなら先に「触診」で

ステータスを確認すればよかつた。

(ついでここにいらっしゃも連れて來たぜーーー)

コーダの影、つまりマーフィーから王様と王妃、あと姉妹兄弟か？
が飛び出して來た。

「（王様バカ！王様バカ！王様バカ！

どこの世界に魔王のなかにロイヤルファミリーまるごと入れてお城
を抜ける奴がいるかーーー）」

「????????!!!!」

俺のツッコみに…意味は通じてないはずだが…王様は胸を張つて答
えた。

（くくく、娘のデート現場をのぞくためなら魔王だらうといき使
つてやる…だそうだ…負けたな？）

うわっ！なんか物凄い敗北感…てなこと言い合いしながら聖幕でミ
ルをあしらっていたら、店の周りに物凄い人垣ができて來てしま
た！ミルの名を連呼している。

（さすがは姫巫女！ここまでとはー！）

?…姫巫女って…たしかミルのこと？

（姫巫女がどうしたってんだ？）

（この国で姫巫女ミルフィーユっていえば国王より人気がある国民
的美少女だと…噂でしか聞いたことがなかつたんだが。）

なんだつてー！ミルは国民的アイドルだつたのか！

王様が周りのみんなに何かを話しかけた…するとみんな笑顔で…手をワキワキさせながらじりじり寄つて来た…」（怖え！）

（なんて言つたんだ？）

（ミルの恩人が恥ずかしがつて逃げよつとするから捕まえるの手伝つてくれつて…褒美もだすつてさ。）

くそつ、こうなつたら聖幕をフルに使つて…

「（盗札！）」

影からマーフィーの手が伸びて来て胸を探られた！

（「聖幕」は2枚とも預かつとくぜ…」これを逃げ切れたら拍手してやるよー！）

（こひ、オニー！アクマー！俺の『写しーー！』）

（ケツケツケツ…キモチイーー！）

くつ、謀つたな！

仕方が無い！他のカードはまだあんまり使つたことがないが全力を出せば…

…その後、あつさり捕まつて王城に連行されました…マル

魔王のはかいろ（後書き）

どうですか？

ライトな感じを楽しんでもらえたら嬉しいです（笑）

裏設定ですが、ミルは国民的アイドルだったので、あんな垣間をしながらも普通に帰つて来ても歓迎されたのです…。

あの垣間がプラスに働いたのはコータとマーフィーに対するものです。

ここまでが導入の物語と作者はおっしゃります、どうだったでしょうか？

これから先もノンビリでライトでチートな話を紡ぐつもりです、お付き合いしてくだされば幸せです。

ミルの心配と新しい仲間（1）

ミルが語ります。

カタンコトン…馬車の音が、揺れがミルの心をブルーにするの…。ため息をつきながら馬車の窓から外を眺める。

「うふふ、ミルはまたコーダさんのことを考えているのね。」

隣に座つた母…王女メリッサが言葉をかけてきた。お母様も私と同じオレンジ色の髪と猫耳をしているのによく似ていると言われる…猫耳は女神アンノルファイに愛でられた者の証なの。

今は神殿のお勤めを終えた帰り道。

今日のように2人してアンノルファイ教団の神殿に赴いて神官としてお務めするのはしばらく間があいていた…ミルはここ1年は聖なる槍を召喚する特訓のために神殿に泊まり込んで修行をしていた…なので久しぶりのお母様との仕事に幸せを感じていたの。でも終わつた途端、早く帰りたくて仕方が無い衝動に駆られたの…。コーダの近くにいないと…不安で不安で…。

「まだ、この間のことを気にしているのね。あれは彼を1人についたちのミスよ…コーダさんを責めるべきでは…。」「わかつてるの…でも…。」

先日、王女ミルフィーユこと私の生還パーティーが催されたとき、コーダも皆に紹介されたの。

コーダは「私の帰還のために力を貸してくれた写しの世界の無力な少年」ということにした。そして褒美として私の父の従兄にあたるグレン叔父様の非保護者になつた。つまり事実上の養子…グレン叔

父様には今子供がない…になることになったの。これによりコータの身分は保証されたものになるはずだったのに…。

「いっぺんに20人も婚約するなんて…、コータのバカ。」

「まともに会話もできない10歳の男の子に婚約の話を振る大人が悪いのよ。お父様もその件は無効だと正式に公表してくれたからいいじゃない。」

実は「触話」の魔法カードが使い過ぎて破れてしまい会話がうまくできなくなっているの！

なんとかなるとコータがいつので出席させたけど、叔父様の養子つてことは公爵の爵位を譲られる可能性もあるから…。

まだこちらのしきたりを知らないコータは宴席で多くの人と会う約束をしたみたい。

そのときに相手が娘を紹介すると言つたのをコータはそれほどたいしたことではないと思ったみたい…親が自分の娘を紹介し、コータが会う事を承諾した時点で婚約が成立することに全く気付いていたかったの！知らないからしょうがないかも知れないけれど…！

後でそれに気がついたグレン叔父様は頭を抱えてしまった…この国の法律上では違法ではなかつたの。

コータはみんなの前では強がつて笑つていたけど血室ででかなり凹んでいた。

さらにその後のウワサが最悪なの…コータは頭がユルくて誰にでも結婚してくれつていう男の子というウワサが流れたの…！お陰で下働きのメイドなどもことあるごとに言質を取ろうとしてコータに迫るつて目にもあつて…いるの、もう…！…！

「そう言えば、お父様がコータさんの希望した人物に丁度いい人を手配できたって言つてたわ。今日あたり来ているかもしれないわね。どんな人か聞いてる？」

話題を変えるためか、お母様がことわら明るい声で話を降つて来た。

「知らないわ？ずーっと歳上のメイドと、教養があつて言葉や歴史やマナーと一緒に出来れば魔法も教えられる人でしょ？」

誰かしら？お父様がまつかせなさい！と言つていたからチヨット不安お茶圓なのよね、待こいつ、一つ話こな。

そんな話をしているうちにお城に着いたのでピータの部屋に早足で向かう。

「コータ！私よ！入るね。」

扉を開けて中に入ると… 女の子がコータに手を回していく、今にも…

「ダメー！」

二
ノ
八
九

コーダを突き飛ばしたら空いていた窓から落ちて…下の池に盛大な水しぶきがあがつた。

ふう、救助成功なの！！

ミルの心配と新しい仲間（2）（前書き）

はじめまして。
新キャラのエ・クレアです。

”エ”はエルフの部族の名前です。う。
この大地の海の近くの森に住んでいます。
チャームポイントは緑の髪と瞳かな。
背はミルちゃんより頭一つ分大きいです。
人間でいうと14歳くらいかな。
実年齢は聞かないでね（笑っているけど…田はマジ）
よろしくね。

ミルの心配と新しい仲間（2）

今、池に落とされてずぶ濡れになつた俺は自室で着替えをして頭をタオルで拭いて乾かしている。暖かい季節が近づいてきているみたいだがまだ風は冷たい。部屋にはアンノルファイ教団の法衣を着た猫耳のミルと、メイド姿のエルフのクレアがいる。

「つたく、イキナリ突き落としやがつて…。」

そう小声でぶつぶつと言つ俺にミルは小さくなつて反省のポーズをとつてゐる…怒りきれない、相手は子供だ。

クレアと密接していたのは魔法による精神感応空間を保つためであるが、どうもミルは女性が近くにいるだけで俺が結婚を申し込むと思つてゐるらしい…失敬な。

とにかく一番の懸案であつたコミニコニケーション不足は今日で解決できた。今はミルやクレアの会話が普通に聞き取れる。

クレアは見た目は14歳くらいのエルフで王様が今日連れてきた。俺の要望した全てを満たす人物だと。

ただし俺の要望は「歳上つまりオバちゃんのメイド」と「この世界を知るための先生」を希望したんだが。

メイドは若い女の子に日常生活を色々手伝つてもうつのは恥ずかしいから。この前、17歳くらいのメイドっ子に着替えを手伝われたときカワいい！つて言つてかなりショックだつた…俺は24歳なんだよ！身体は10歳だけど（泣）。

クレアは確かに年齢は上みたなんだけ…全然解決になつていな氣がする。

あと、この世界のことを知る先生のような人物を希望したんだがメイド兼務とは言つていらないんだけどなあ…。

ああつ、細かいことはもういい！

とにかくクレアが精神感応空間魔法…触話に似ていてるけど言葉はそのまま…頭の中で電話するみたいな魔法…を使用して会話の学習をしていたんだがこの魔法、長く続けると単位時間あたりの会話が長くできる。今日は3時間くらい会話の勉強を連続で行つたのだけど、最後の方は1分で10分くらいの量の会話ができた。お陰で会話は聞き取れるし、この世界のことも色々わかつた。後何日かこれを続ければ会話に不自由はなくなるだろ？。そうすれば次は文字の知識だな！

「本当にミルちゃんは大きくなつたわね～。この前会つた時は一
んなに小さかつたのに～。」

ミルとクレアが世間話をしているのだが…クレアは独特のクセのある話し方をする。

今話してクレアは手で大きさを示してみせていたがそれは乳児サ
イズじや… わすがにミルも返事に困つて～る。

「ともかく、スー君に頼まれたからちやんとしたエルフに育てるわ
ね～。」

「えつと、スー君でお父様のことですか？」

「ええ、前はよく遊んであげたのよ～。」

さすがエルフ、長命だな。

とにかく助かる！あらゆる知識を詰め込んでいたらしくあれだけ喋つたのにまだ序の口つて言つてた。

魔法も教えてくれるつて…てんこ盛りだつて…

「あと～こんな体験はじめてなのよね～。」

クレアの視線の先が…に向いている。

おお！“第一見える人”発見！

ミルの心配と新しい仲間（3）

クレアにはコレが見えるらしい。

異世界に来てから今日まで俺は多くの人達に会つたが「コレが見えた者はいない。

マーフィー やミル、王様、王宮の人達…誰にも見えなかつたようだつた。

ついでにやつかいなことがある。

「こんな体験て? なに?」

ミルがクレアに問う。

「…えーと、なんの話してましたかしら?」

やつぱりか…。俺はミルの背後に回つてコレを片手で差し、もう片手をムリムリつて感じに顔の前で振つた。

「あつあー…やつぱりほらっ…『』の世界の住人で会つたことなかつたし~。」

意図が伝わつたらしく、クレアはミルに「まかしの会話をはじめた。難儀だよな、コレのことを誰かに伝えようとすると頭が真っ白になるから。

コレ…俺の腹に突き刺さつたままの…おつと…強く意識だけで頭真っ白になるしー！

まあ痛くないし、触れることも出来ないから生活に支障は無いし…協力を期待できそうな人物も見つかつたし…後にしよう。

それよりも、

「ミル！ 神殿行つてきたんだろ。聖幕のカードは？」

「うん！ 無事にカードメーカーさんの処に着いたみたい、何とか直せそうだつて言つてたつて。」

カード魔法は心ポケットにいれおけば誰でも即座に魔法を扱うことができる便利なものだ。しかし、扱い方が悪いと破れてしまうらしい。

俺は魔法の扱いに素人だつたために「触話」の魔法カードをダメにしてしまった。

そして沢山使つた「聖幕」のカード2枚も破れる寸前だつたようだ。「触話」だけでなく、「聖幕」までを失うわけにはいかない。

魔法カードはカードメーカーという専門の魔法使いが作つたり直したりできる。この国にはレアな「聖幕」のカードを直せるだけの実力あるカードメーカーがないらしい。

そのために、魔法カード作りが盛んな自由都市国家群のなかのトレカという国に送つてもらつて修理中なのだ。

この世界の人間側の勢力範囲内では2つの教会が協力して交易をサポートしているらしい。今回の場合、フィルガード王国とトレカという都市国家はあまり仲良くないらしいのでアンノルファイ教団を通じて修理してくれるよう依頼したらしい。ともかく直るなら嬉しい！

「コーダは魔力が底なしだから色々できる魔法があると思つわ～、楽しみね～。」

「うん！ カード魔法もいいけど自分で使いたい！
むっちゃ楽しみ！！」

1・2ヶ月くらい出かけてくるつて言つてたマーフィーが帰つて来る前に習得して魔法を見せてやりたいな。

「クレアさん！」「一には、まず防御の魔法を教えてください…」
友人に言われてますので。」

ミルがいらないことをいつ…派手なのでいいじゃん！

「クレアでいいわよ～。そうね～暴発が心配だから地味なのからに
するわね～。」

ぶーぶー！

だがその辺は理解しているので不満は言わないぜ、俺は大人だし…
ちつ。

「コータの顔ヘン！」

「ミルちゃん、ここは生暖かくスルーしてあげるのよ～顔に出てる
けどね～。」

…返つて凹むから…それ。

マークイーと月の蛇（一）

おじぎばなし風の語りをしてみました。

「じは6の大地です。

時計の盤のような形をしたこの大陸では、6時の1時間分の範囲を「6の大地」と呼びます。

この地は、人間側と魔軍側とが何度も何度も戦いを繰り広げた悲しい土地です。

そのために瘴気と呼ばれる濁った霧のようなもので覆われて生きるもののが住まうのに適した場所はごくわずかしかありません。

夜には骸骨が歩き回り生きているものを襲います。

相手が人間でも魔族でも関係なく襲いかかります。

そんな土地のあるところに黒髪の男が空から舞い降りてきました。しばらく歩くとある一点、小さな岩を見つめてふうっと息を吐きました。

「よひやく見つけたぜー！」

男は急にふわりと跳躍して10㍍ほど後ろに下がりました。

今までいたところの地面が岩の口となつてバクッと閉じたためです。

「あつぶないな～」

言葉とはついはらにせして驚いた風でもなくその男…マークイーといつ名前なのですが…は口笛を吹きながらそつづぶやきました。石の口はそのまま蛇の頭となつて地面に出てきてどぐろを巻きました。

そこには岩の大蛇です。

「フシユーネ…さすがは…魔王の肩書きを…持つだけのことば…ある。

「気配に覚えがあるな。3魔王ケンプの副官ブルートの手下か?」

「そのくらい…わからぬわけでは…あるまい…我は岩蛇と申す…では…参るだ…」

そつ…と岩蛇は何かの呪文を唱えました。

するとマーフィーと岩蛇を包み込むようにして岩のゲームが出来上がりました。

真っ暗闇になりましたがマーフィーは慌てません。

彼は魔人の中でも影族と呼ばれる部族の出身なのです。

影を自在に操る彼ら影族にとって暗闇は最も安心できる場所なのです。

「星の光よ!」

今の言葉は、魔軍側の共通語…つまり魔法の言葉ではありません。
しかし、この空間のすべてが光りはじめました。

「カード魔法か! それにしても…何故知っている!」

「フシユーネ…ブルート様は…全て…お見通しだ。影族の力は…使え
まい。」

そう言って迫り来る岩蛇から力を失ったマーフィーは地面を走って逃げ回ります。

しかし、この空間に逃げ場所はありません。とうとう追いつかれてじぐりに巻かれてしまいました。

「覚悟！」

大きな蛇の口がマーフィーに迫ります！
ああ、このまま食べられてしまうのでしょうか？

マークマークの店（2）（完書セ

また評価を付けていただきました！
本当にありがとうございます。

見に来ていただいて、お気に入りにいれていただけの方も増えて来て、評価も付けてもらって、こう...リアクションをいただけると本当に嬉しいです。

マークイーと岩の蛇（2）

岩蛇が自分とマークイーを包み込むようにして作ったドームがで
きています。

暫くしてドームは無くなり元の地面に戻りました。

そこには岩蛇だけです。

その岩蛇に2匹の蛇が近寄ってきました。

1匹は羽が生えている飛蛇。

もう1匹は息をするたびに炎を口から漏らしている炎蛇です。

岩蛇を倒してマークイーが出て来たら彼らが相手をする2段構えの
作戦でした。

「フシュー！上手くいったようだな！」

「魔王とはいえ攻略法さえ分かつていれば恐れるほどの相手ではな
いな！」

「マークイーもえ…倒せば…この者は…残りつて…いいのだったな。」

「

そう岩蛇が言つと少しが割れて中から赤い毛並みをした狼が転がり
出して來ました。

身体は岩の縄で縛られています。

「よし飛蛇ー報告して来い！」

「フシュー…」

炎蛇に飛蛇は視線を投げかけます。

赤い狼を喰らえば強くなれるからです。

魔族は強い者に従いますが常にその力を狙っているのです。
マークイーを喰らった岩蛇は強くなっていることでしょう。

この獲物を逃せば飛蛇と2匹とは実力差が大きくなるのです。ですが結局この中で一番弱い飛蛇は諦めて報告に行くことにしました。

同じ蛇族だから他のことで穴埋めする約束を実はもうしているのです。

「さてと、いただくとするか。」

炎蛇は大きな口を開けて赤い狼をひと口に飲み込もうとしました。しかしそのとき岩蛇が巻きついて来て身動きがとれなくなりました。

「フシューーするいぢーー！」今まで喰らう気か！」

炎蛇の問いに答えぬまま岩蛇は締め付けを強くします。

しかたなく炎蛇は炎そのものになる自身のスキルを使い戒めを逃れました。

が、その炎をバクバクッと喰らうものがいたのです！

いつの間にか戒めをとかれた赤い狼でした。

炎狼といふこのものは炎が大好物なのです。

「ガフシューー！」

食べられて小さくなつた炎から元の蛇に戻つた炎蛇は変身が解けて人型に戻つてしましました。

地面上両手を付いて荒い息をしています。

その横に岩蛇も転がり人型に戻ります。

こちらも苦しそうにしています。

その岩の蛇だった男の口から黒い影が出てきました。

そう魔王マーフィーが中から岩蛇を操っていたのです。

「すま…ん。無念…。」

「ぜえっ…ちつ、そういうことか！ブルート様の策は失敗したか！」「並の影族なら通じたさ…相手が悪かったな（危なかつたけど…コータの真似しといて正解だつたよ）。」

実はマーフィーは空を飛んでいる最中に影と触診のカード「魔法」を併用してこの辺りを探つていたのです。コータのように複数のモノを探れませんがでしたが3匹がいることを調べていたのです。

3匹のステータスを探り皆蛇だけが闇（魔）属性の魔法カード「星の光」を持っていたのに気がついていたのです。

魔族はカード魔法に頼るものはほとんどいません。

自分の力が全てだと思うものが多いからです。

マーフィーは影族の自分への対策が立てられていることに気がつきました。

わかつてさえいれば対処方法はいくらでもあるのです。
例えばとぐろに巻きつかれればそこに影が生まれます。
大蛇の大口の中にも影が生まれます。

「テス…久しぶりだな、相変らず美しい。」

赤い狼は真っ赤な髪をしたグラマーな女性の姿になっていました。

「ここつらは、私が喰らう。」

やはりこの女性も魔族のようです。

マークイーと魔の蛇（3）

魔王マークイーと大魔王ショリーの副官で炎狼の美女テス、そして魔人の蛇族の男が2人そこにいました。

蛇族の2人はもう観念したのか大の字になつて目を閉じています。テスはこの者達を喰らう氣でいるのです。

「ここに聞きたことがある。おー、ショリーについて教えるよー。」

「ふん！ 知らねーよ。」

「我が大嘘を吐く前に殺すがいい。」

「無駄だ。喰らひ。…む？」

そう言つて前に出ようとしたテスの身体は動きません。影で縛られているからです。

「何の真似だ？」

「チヨットは落ち着けよ、そんなんじゃ嫁のもういてがなくなるぜー。まついやとなつたら俺がもらつてやつてもいいケド（笑）。」

「マークイー？」

テスには不可解でした。以前のマークイーはショリーに夢中で他の女には目もくれませんでした。美しさでは大魔王にも負けないと自負するテスの誘惑にも全く靡くことがありませんでした。

「おい、お前ら俺のところで働かないか？ 面白いもの見せてやるぜ！」

「私は断るー！ 命押しだに裏切つたと思われるのは心外。…だが、我が命でこの者の命を救つては下さらぬか？」

「おいー若蛇！ おめー力つけてんじゃねえぞ！ 俺を殺せー！」

つには仮があるんだ！」

「裏切りじゃ無ければいいんだよナ…」

「やりと笑ったマーフィーを見てテスはゾクゾクしてしまいました。ショリーでさえも知らない昔のマーフィーの顔だつたからです。

「2人とも身体をよつく調べてみるよ、面白くないモノが付いてたぜ？」

炎蛇は手で体をまさぐりました。

岩蛇は口を開じて鼻をヒクヒクさせました、蛇族は鼻がきくのです。やがて髪の毛の中から小さな丸いものを摘み出しました。

「ブルート様の…毒卵。」

「俺にも…。」

「ブルート様は策士だ…我等が喰われるのをみこされて…とうに見捨てられていたか。」

「どーするー？」

「炎蛇よ…飛び蛇に追いつくか？」

「ああ。おい！行かせてくれるか？」

「決まりだな！じゃ2匹とも俺とノータの部下つてことだ…あつ3匹か？」

「マーフィー殿にこの岩蛇、忠誠を誓つ。ノータ殿とは？」

「そのうち話すさ。炎蛇は行きな！」

炎蛇は炎の翼を作つて飛んでいった。

「あいつらが戻りしだい、とんズラだ。」

「お前…本当にマーフィーか？」

「ケツケツケツ…テス…お前の口にはどう映る。」

「昔の……魔王になる前のお前に見える。」

「ははは、でも今の方が魔王らしくない?」

「……りたくない。魔王ならあらゆるモノを喰らう強くなるべきであるつ……ショリーのよつ。」

「うーん、たぶんそれだと俺とロータの趣味に合わないんだよねー。うん、つまらん!」

「ショリーを嫌いになつたのか?」

「いや……ただあいつこじだわらなくなつたのは確かだ。」

テスは知つてゐるのです。

ショリーが彼にとつての”全て”と言ふる存在になつてしまつていったことを。

そんな彼のために…彼の近くにいるために…テスは大魔王の副官をすることにしたのです。

マーフィーは”過去”を乗り越えたように彼女には見えました。

「ふん!マーフィー……お前の面白いモノとやらがなんなのか、私も見せてもらおう。」

「ふん!」と言つてはみたものの、彼女は狼の姿でないことに内心ホッとしていました。勝手にシッポが大きくふれるのを今の彼女は止められる自信がありませんでしたから…。

この日マーフィーは大切な友達を助けて、敵だつた3匹の蛇を家来にしました。

マーク・トウェインの序文（3）（後書き）

今回の書き方せじでござりでしたよ。

おとぎ話風を意識した語りでしたので少し子供っぽく感じた方もいたのではないでしょうか？

作者は色々な語りで作者が飽きなこりつに楽しんでこらねつもつです。皆さんも楽しんでいただければ幸いです。

魔法実験を兼ねてのピクニック（1）

カタンコトン… 夏が近づいて来ていることを知らせるような口差しの中を2頭だての馬車が走る。

馬車の中に乗っているのは俺とファイガード王国第2王女であり女神アンノルファイに愛でられた存在であることを示す猫耳をしているミル、エルフで俺の先生兼メイドのクレア、俺の「写し」である4魔王マーフィーの4人だ。

後、別に1騎… 女騎士が付いてきている… 第1王女のサーラ姫だ。クレアが俺の元に来てから1ヶ月あまり、その間に魔法の基礎は納めた。

カード魔法はバツチリOKだ！ 俺はカード魔法が発動してから”扱う”ことに関してはマスターしていたに近いらしかった。ただ、発動させるのに必要な魔力を絞れていなかつたようだ。例えるなら空気のいれすぎで自転車のタイヤをパンクさせるような感じ。

クレアに複数のカードを心ポケットに入れて魔法を扱えることを見せるどびっくりしていた。やはりこれが出来る者はいないようだ、クククッ。ちなみに「聖幕」の魔法カードも修理されて戻つて来たぜ！

今日は俺の詠唱魔法の実験のため王族の別荘地に向かっている。俺は魔力の量が底なしのようで間違つても王城の中で魔法を暴発させないために、という配慮である。

ただ、クレアが「ピクニックみたいですね～、お弁当でも作りましょ～。」なんて言ったため、ミルが「ミルも作るのー！」てことになり昨日は大変だつたらしい。タベの食事の品目が少なくてコックさん達が王様に謝つていたが… たぶん原因はミルだらう、何が起こつたのか怖くて聞けなかつたが… 王様はノープロブレムって言つてた。本当にフランクな王様だよな。

今の車内の配置は進行方向に背を向ける形でクレアとマーフィー、

進行方向を向いて俺とミルが並んで座っている。マークは今朝
帰つて来たばかりだ。みんなで情報交換することになった。

魔法実験を兼ねてのピクニック（2）（前書き）

お気に入りにいってくれる人が増えてきました、本当にありがとうございます。

PVアクセスも1万を突破しました。

これからも楽しみながら楽しんでもらえる作品を作りたいと思います。

魔法実験を兼ねてのピクニック（2）

今、みんなで情報交換会の真っ最中です。

「……てなワケで魔軍側は混沌としているよ、3魔王んトコ以外。」

「うーん、こっちも聞いた限りでは人間側も身動きがとれないよな。」

「

「そうみたい、お父様も困っていたの！お姉さまもよく王都近くに現れたモンスターを倒しに行っているの。」

「うちの部族は大丈夫だけど、他のエルフの部族は大丈夫かしら？」

「？」

マーフィーの報告と俺達がこっちで集めた情報を整理すると今回のこと、つまり大魔王シェリーがいなくなつたことで大きく情勢が変わってしまったことがわかる。

変化する前の情勢は以下の通り。ちなみにここの大地は時計の盤のようなかたちだ。

魔軍側

2魔王：12、1の大地

1魔王：2の大地

大魔王：3、4の大地

3魔王：5、6の大地

（12と6は戦場、大魔王と3魔王は共同戦線を貼っている）

人間側

ファイガード王国：7、8の大地

都市国家群ビックチャイルド：9の大地

カタカタ帝国：10、11の大地

変化後：

まず3456の大地を手に入れたことになる3魔王が6の大地をファイガードに譲った。これにより危険な6の大地の管理と、停戦時に魔軍が放つたモンスター達が7の大地を脅かしていたことでファイガード王国が動けなくなつた。

次に3魔王はシェリーの直轄地だつた3の大地を放棄した。そのためここに隣の2の大地を支配している1魔王が攻め込んでいる。3の大地の者は抵抗しているらしい。

同じころ、人間側の帝国カタカタと戦争をしていた2魔王は停戦の和議を申し込んだが、双方の都で相手方の勢力と思われる集団によるテロが起こり停戦どころではなくなつていてる。

また、9の大地にある都市国家群ビックチャイルドの中でも都市國家間で争いごとが起こつて不安定な情勢になつていてる。

「ほほコータの指摘どおりだな。仕組まれていて！タイミングが良すぎる！ケツ！」

「でも、これは防ぎようがないですねえ。」

「うちの国だけでも何とかしたいの一。コータ！何とかなんないの？」

「…なあ、マーフィー。明らかに時間稼ぎつて感じがするんだが、3魔王の狙いはなんだろう？」

「あるとすれば、5年後の魔王会議だ。魔軍側では最高の意思決定機関になる。…大魔王が誰かもこれで決まる。」

「多数決とかですか？」

「んなわけないだろ（笑）。力ずくさー魔王以上の称号を持つていいないと出席出来ないんだぜ！」

「それじゃマーフィーは出席できるのね。みんなに仲良くしようつて言えないの？」

「一応出席はできるけどな、それは言いたくないセリフだぜ（笑）。魔王の沾券に関わる。」

「そこをなんとかするのーコータの写しでしょう！」

「ミル、やめとけ。言つてきく様な奴らじや無いだろ？…それを言うならゆづことを聞かなければならぬ”状態”を作つておくべきだ。」

「どうする氣～。何か企んでるわね～。2人とも同じ顔しているわよ～。」

「ケツケツケツ！手駒も増えたし：仕込みは始めてきたけどな。」

「今は言えるような段階ではないから。」

「教えて欲しいの！」

「ミルも俺の力になつて欲しいー時期が来たら必ず教えるから今は待つて欲しい、なつー。」

「う、うん（＊＼＼＊＊）」

「難しい話はもうよしまじょ～。今日またかくのピクニックなんだしへ。」

…違つだろ、ティーチャー！

魔法実験を兼ねてのピクニック（3）

王族の別荘地に到着したのはお昼のショット前だつた。

先に来ていた人たちがベンチとか椅子とか組んでくれてある。このあたりはさすがはロイヤル！ってな感じだな。

クレアとミルの作ったお弁当…こんなにどうすんだろ…を降ろしていると、サーラ姫がお昼の前に身体を動かしたいと言つて來た。どうやら、ずっと前からマーフィーと戦いたかったらしい。マーフィーも承諾し主に武器での試合をやろうということになった。これにミルが自分モー！と言つて來たので3者三つ巴戦…ってことになつた。

もちろん俺とクレアはお茶会…もとい観戦である。

サーラ王女は王国でもトップクラスの実力を持つている戦士だと伺つていた。練習は見せてもらつたことはあるが魔王相手にどうまで通用するか見ものだ。

片手剣と丸盾、全身鎧…但し所々露出あり…といいでたちだ。マーフィーとミルは軽装である。武器は持っていない。

まず、サーラ王女が動いた！

フェイントを織り交ぜながら剣を突き出す…様子見と言つたトコが。

マーフィーはそれをゆらりゆらりとかわす。
ミルが横合いから爪攻撃を仕掛けるが影が膨らんで相手をする…どうみても猫じやらしだよな、アレ。

いきなり王女が後方に飛んだ…いつの間にかマーフィーは双剣を握つていて突き出している。攻守交代とばかりにマーフィーが双剣を振るいサーラ王女を追い立てる。サーラ王女は慎重に盾と剣でさばきながら反撃の機会をうかがつてゐる。

ミルの攻撃…あのドリルアタックをピヨンとマーフィーが弾いた瞬間サーラ王女がマーフィーを切り裂いていた…と思つたらマーフィー

一が2体になつた。

それぞれが1本の剣を持つて左右から挾撃を開始する。あつ、なんかサーラ王女嬉しそう…少し開いた口元から犬歯が口から出てて…チョット怖い。

「やはり、私が戦つた大魔王はお前か！」

「あたりー！本物とやつてたら死んでるぜーーー！」

そういえばサーラ王女は何度か大魔王と戦つたことがあるつて言ってたつけ。影武者のマーフィーが相手をしてたつてワケだ。サーラ王女のスピードが増す！2人のマーフィーも！

この距離で見えない！ミルも見失つてオロオロしている。

ピタッと止まつた3人が見えた。1体のマーフィーが剣をサーラ王女に突きつけ、もう1体はサーラ王女に剣を突きつけられていた。

「！」のくらしにしようぜー！ケツケツケ。

「…そうだな、本気になりそuddash;だ。付き合つてくれて感謝する。」

そう言い合つて剣を納めて戻つてきた。
ほっぺたを膨らませたミルも。

「お疲れ、凄かつたよ。」

「ミルも頑張つたわね～。」

「慰めはいらないの一。」

「そんなことない、この経験は貴重だと思つよ。」

「コーダがそういうなら、うん？」

「じゃあ、昼メシにしようつー！」

ところどで、お弁当を広げたんだが…

「オレ、チョット散歩してくる。腹減つてないしー。
「わ、私も付き合おう！」

…マーフィーとサーラ王女が逃げやがった。

ミルの作ったお弁当は…ナゼ…黒いものしかないのか？
クレアの作ったお弁当は…色合いは美味しそうなんだが…砂糖漬け
とか蜂蜜漬けとか激甘…。

視覚的にも嗅覚的にも刺激的な…三歩ほど引いてしまった。

2人とも魅力的な笑顔で…絶対に俺が喜んで食べると疑わない顔で
…俺を見ている。

ぐつ！レディに恥をかかせてはいけない…ここからは俺の戦いが始
まるようだ。

「いただき…ます。」

「「召し上がり！」」

…この日、俺の好物が変わったことを知る人は少ない。

魔法実験を兼ねてのピクニック（4）

なんのためにきたか忘れかけていたが、ようやく俺の魔法実験を始めるに至った。お昼ご飯はどうだったかって？もちろん美味しかったさ！

ミルの黒ご飯の香ばしい歯ごたえ！

クレアのパスタサンドのまつたりとした甘味！どっちも絶品だった！

…もう昔の俺に戻れないのサ。

いつの間にかお昼を随分まわってしまっていた。

今回の魔法は俺の希望をクレアに相談したところ、詠唱魔法の「天視」というものにした。

離れたところを見ることが出来るノーマル系の魔法で、地味だが使える魔法だ。

教えてくれたクレアには「悪いコトに使つたらトンテモナイ呪いをかけてあげる〜？」って言われている…ブルブル（怖）。あつ、悪用は禁止だ！

「じゃあ始めましょう。魔力を紡いで〜。」

クレアの指導を受けて静かに魔力を紡ぐ。

ここでのポイントは魔力量の調節だ。

俺は多く出しすぎる癖がある…よし、これでどうだ。

「いいわよ〜。次は練つて〜。」

練るというのは紡いだ魔力を”使う術”に変換する準備のようなものだ。

これは意識上の問題のよつなのでうまくイメージ出来ないことが多いのだが… こんなんでどうでしょ？

「うん落第すれすれね、次はもっと頑張ってね。とりあえずそれで行きましょう、真音のリハーサル。」

「【天より…観る】」

「【見る】よー！」

魔法の核となる真音は発音とイメージがチョットでもズレると違つものになる…これが一番難しい。

実はここでズルをしている。

真音は”手に入れる”あることをしなくてはならないらしい。

詳しく述べてもらつてないが普通だと真音の【天】と【視】は手に入れるのが難しいらしい。

特に【天】は手に入れるのが非常に困難だと言つていた。
今回にエルフのクレアに手に入れてもらつて”譲つて”もらつたのだ。譲ることが出来る魔法使いは少ないらしい。ミルはズル過ぎるの〜とか言つていたが多少のことは見逃して欲しい。

目標が大つきいんだから時間短縮出来るものはしたいんだよね。

「【天より見る】」

「いいわ～今度は魔力を込めて、少しづつねづくりね。」

「【天より見る】！」

リハーサルまでは行つたことがあつたが、魔力を込めたのは初めてだ。

うまくいけば真音によつて魔力は術に変換される…ここで精神を乱すと魔力が霧散して失敗してしまう…慎重に…慎重に…

すると魔力が変換されて半透明の球体がぽんっ…と田の前に現れた

…いやつたあ！成功だ！

頭の中に映像が浮かび上がる…視点は下向き、今は地面と自分のつま先が見える。

「なんとか成功みたいね～。制御は大丈夫～？」

「大丈夫。」

魔力を紡ぐのを忘れないようにしながら球体をコントロールする。動かせるけどピーキーだな…右に動かした…ややつ…一気に動き過ぎる…

「ぶつけると壊れるわよ～！上に動かして～～！」

右に動かしたら思つていたより随分速く動いた。危ない！木にぶつかる！上だ！上！

上にあがつた…おお、魔力が結構必要で距離に比例して消耗していく…まあ俺は魔力量チートなのでこの辺りは全然気にならないが…それはいいんだが…。

うーん、これは…大陸が…星が見える…はは…は。
…上がり過ぎたね。

ブルートの怒り（一）（前書き）

読んでいただける皆様へ

作者の考えですがこの物語は読み時間100分～120分を想定して1編（1巻？）とする気でいます。

ですのでこの話で1区切り…つまり1編の山場にする予定です。

精一杯頑張ります。

宜しければお付き合いくださいね。

ブルートの怒り（1）

ブルートが語ります。

現在、3魔王の魔王城では本来魔王ケンプ様が座る玉座に副官ブルート…つまり私が座っている。ケンプ様は今動けない状態なので私が全てを指揮しているからだ。

座っているというのは表現としてどうかと思うが私がそう思うのだからいいのであるう。氷の蛇の姿をしている今は玉座に巻きついている、というのが表現として正しいとしても。

今日も世界を監視することを忘れない…私は完璧主義なのだ。

「恐れながら報告申し上げます。先日、6の大地に赴任したファイガードの貴族は毎夜現れる骸骨どもに恐れをなして一昨日撤退いたしました。」

「よろしい。」

これですでに2人目だ。ファイガード王国は明け渡した6の大地を管理するのに手こずっている。骸骨どもを駆逐するには正規の軍隊とアンノルファイ教団の力が必要であろう。そうすれば王の直轄地となる算段が強い。そんなことは戦役の褒賞を得たい貴族達が許さない。かといって骸骨どもに戦う戦力を有するだけの貴族は少なく、いたとしてもわざわざこんな危険な土地を欲しがるほどバカではない。

「報告申し上げる。3の大地の者達はテスが帰還したことあります。じぶとく1魔王の兵を受け返しております。」

「ふふふ、怪我の功名だな…その方らの不甲斐なさのせいで逃げ

られたと思つたら我らの盾になつてくれるとは。だがこれで失敗が帳消しになつたとは思わないことだ。」

「わかつておりまする。蛇族の長よ。」

報告にきた岩蛇は先日大きな失敗をした。しかし駒としては使える方なので切り捨てるはしばらく先にした。そのためには同じく失敗した炎蛇、飛蛇と共に一兵卒に降格させ使い走りをさせている。いい報告が入つてきたので気分がいい。少し自室で休むことにした。

ブルートの怒り（2）

自分の部屋に戻ったブルートは変身を解いて鏡の前に立つた。
私が一番好きなものは自分の美しい姿なのである… いつみてもウツ
トリする。

しかも、この鏡はただの鏡ではない。蛇族の代々の長がその氷の力を
つぎ込んで作り上げた魔法の鏡なのである。
もし、この鏡に世界で一番美しい者を写すように言えればその姿を写
し出す… それではト・ウ・ゼ・ン！ 私が映るだけなのでつまらない。

「鏡よ鏡、世界で一番恐ろしい人物は誰だ？」

この問いに対しても私の奸計により大魔王ショリーを捕まえたとき
から… 世界中に火種を撒き散らして争いを耐えないように画策し実
行したときから… 鏡は私を写すようになった。

そう、私は世界で一番美しく、恐ろしい存在となつたのだ！
1ヶ月ぶりに鏡に問い合わせたのだが映るのは当然わた…

な・ん・だ・と…！

私は部屋の中にある数体の像のうち、人型の一体に歩み寄つた。

「起きろー！」

この者にかけた氷の呪いの半分を溶かした… そつここれは像ではなく
氷の呪いで氷漬けにした者達だ。

上半身だけ氷が溶けてその者はゆっくり目を開けた。

「…まだワシは生きておったのか？」

「人間の呪術師…いや呪士よ…あの鏡に映つた者を呪い殺せ！…できたら開放してやろう。」

「…ふん、呪いを知らぬ身ではあるまいに…姿だけでも呪いはかけられるが…殺すまでは無理であろうて。」

「…これを使うがいい。これで出来ないとは言わさぬぞ。」

「うひ、黒竜の怨念！」

私が手に持つたカードを見て人間の呪士…呪いを使って相対する者を葬る魔法使い…は声をあげた。

やはり知っていたか…カード魔法の中でもレア中のレアカードのこれを。

このカードは危険すぎるので自分で使うわけにはいかない…そのためにこの呪士を生かして置いたのだ。

呪士にかけた氷の呪いを溶かす…呪い解くわけではない。

「3日以内に結果を出して戻れ。さもなくば氷の呪いがまた発動するだ。」

呪士を追い出すと鏡の中の人物を睨みつける…生きて私から逃げられると思うなよ…!!

姫巫女とのデート(1)（前書き）

今回から場面がたくさんクロスします。
読みづらかったら、めんなさい。

姫巫女とのトーク(1)

「一タが語ります。

[写]の世界から俺がこの世界にきてから3ヶ月ほど経つたある日のこと。

夏を迎えて大分暑くなってきたこと、「俺はようやく2つめの魔法が使えるようになった。

「幕」というノーマル系の詠唱魔法でマントにしたりカッパ替わりにしたりなど応用は効きやすい反面、強度が弱く防御魔法としてはほとんど訳に立たない入門者用の魔法だ。

俺はカード魔法の「聖幕」を自在に扱えるので詠唱魔法でも似た「幕」の魔法は練習にはちょうど良いのではないかとクレアが勧めたから覚えたことにしたのだ。

最初に覚えた詠唱魔法の「天視」はクレアに最も大事な真音を譲つてもらつたが、今回は「幕」の真音を俺が自分で捕えた。

1から10まで自分で仕上げたこの詠唱魔法を俺はとても気に入っちゃつた？

先生のクレアにも内緒で隠れて練習したほどだ。

クレアは魔法以外もいろいろ教えてくれるがなんといっても魔法が一番オモシロイ！

普通の文字の習得が少し遅れ気味のはじょうがないだろう、うん。この魔法で今日はあることをしようと思つている。

「ミル！ チョット出かけてもいいか？」

「何処に？ マーフィーも出かけちゃつたんでしょ？」

「ああ…ちょっと魔法の練習だよ。夕飯までには帰つてこれるからね…」

「ミルも行くの…」

「いや、だからわ。」

「いくの…いくの…連れてつて欲しいの…」

「話聞けて。出掛けたからミルも一緒にこなにかつて…誘おうとしてたんだよ…！」

俺としては最近クレアと魔法の勉強ばかりしててミルとの時間が少なかつたので…ちょっとデータに誘ったのである。

「データの方から…誘ってくれたの？もしかしてデータ…？」

「んつ…まー…やつなるんじやない？」

10歳の子供をデータに誘つのはちよつと恥ずかしいがこっちも見た目10歳だし。

ミルは断らないだろ？…たぶん。

横目で様子を伺っているとミルが顔を赤くして…なにか…不思議な踊りを踊り始めていた。

「でえとおん？」

喜んでくれてるんだよね？

岩蛇と老人の会話

呪士の老人と魔人の岩蛇の会話です。

「いやあ、岩蛇殿…かたじけない。」

「気にされるな！」老人…我の勤めの一環だ。」

「いやいや謙遜なされるな！この老いぼれがこの城で生きておられるのはまさに岩蛇殿達のおかげですじや。…残念なのはお礼をする間もなくお別れをしなくてはいけぬことじや…ブルートはワシを生かしておくまいて。成功しようとしたまこと。おお…お主らの上役を悪く言ひますまんのう。」

「！」老人が気にすることではなかつ…誰かを呪い殺す仕事であつたな。食べ物の他に必要なものは？」

「これほどの人材…おしいのう。普通なら色々用意が必要なんじやが、今回は恐ろしいカードを用意されておる…この身体だけで十分なんじやよ。それより岩蛇殿、この後ワシが呪いを始めたらこの城を離れなされ。万が一、呪いを返された場合ここは恐ろしことになる。万が一のことじやが…離れなされ。」

「相手の心は強いのか？」

「…さあて、人とも魔人ともよくわからぬ…黒髪の子供じや。ブルートがわざわざこんなことをさせる以上、普通の相手ではあるまい。…重ねて言つ。万が一のことじやが離れなされ。」

「…心しておこう。ご老人に心配をかけさせるわけにもいかぬ。」

「おお、すまんのう。…達者でな。」

姫巫女とのデート（2）

コーダの語りです。

ミルをデートに誘つてでかけることにしたがクレアはついてこない。俺はある魔法のことで魔法の先生のクレアに相談したらそれは上級者でないと難しいわ~と言わってしまった。

まあ、別に自分で使えなくともよかつたのでクレアに使えるようになってくれるよう頼んだら、開発と習得に半月くらいかかるといつていた。

なので今日のクレアは魔法を開発するため部屋にこもりきりなのである。

ただし、お守り~とかいつてペンドントを渡された。魔除けの力があるらしい。ミルには見られないように服の下につけた。

デートに誘つたミルと2人でお城を出て近くの公園に向かう。

誘つた後、ミルは急いで街用の服に着替えた。おめかししていくつもより可愛い。

しかも伊達メガネを掛けたりして変装をしていくつもりのようだが
：猫耳でバレバレである。

護衛さん達もさりげなくついてくる。

あれ？ グレンの親父さんだ… 王様に命令でもされたのかな、可哀想に。

グレンさんは王様の従兄弟で俺の保護者を引き受けてくれた心の広い人だ。

公園に向かう途中、露天のお店で腕輪を買つてあげた。あらかじめ調べておいた品物で値段分のお金も用意していたが、ミルへの買物だとわかると99% offになつた。恥ずかしいのをガマンしてク

レアにおこすかいを無心したのに意味が…。

こんな安いものでもミルはとても喜んでくれた。ミルはこんなのよりずうつと高くて綺麗な装飾品をいくつも持っているのに…案外庶民派なんだな。

公園に着くと目的の開けた場所はすいていた。暑いこの時間帯は直射日光の当たる場所を人は避けるので空いてくる…なのでちょうどいい。

「ミル、ちょっと見ててくれ。」

詠唱魔法「幕」を使う。

魔力を紡ぎ、練り、リハーサルをして、魔力を込める…

「【幕】よー！」

「す、」いの一。こんな短時間で発動できるなんてー。」

それでも詠唱魔法の不得意なミルよりかなり長い時間がかかるんだけど…。

俺は「幕」のある形に変形していく。「幕」は「聖幕」と同様に非常に柔軟に形を変えられる、硬さや色も。

「これでどうだ！」

「…・?」これなに?」

ミルにはわからないだろ?」

これは「聖幕」でもできるのだが、今の実力でみんなの前で2つの魔法を併用するにはカード魔法1つ、詠唱魔法1つにしなくてはならない。詠唱魔法2つ同時行使は上級の技術だそうだ。

俺がカード魔法を複数併用できることを秘密にするための策だ。

「ミル」たちにきて乗つて。俺のすぐ後ろに。」

「うん…これ乗り物?」

「ふふふつ、いくよ!カード魔法「風」!」

「ひやー!走つてるー!」

「2枚・4枚・6枚・8枚・10枚!よし、浮いた!」

「すごいのー!飛んでるのー!」

詠唱魔法「幕」で形を作り、カード魔法「風」10枚を出力とする
同じ種類なら併用はばれないので。

魔法飛行機に乗つていざ大空へ!
護衛の皆さんごめんねー。

姫巫女とのトーク(2)（後書き）

実は魔法飛行機の形のイメージが浮かびません。
どんなのがいいと思います？

クレアにまかせなさい（前書き）

評価をまた頂きました。ありがとうございます。
お気に入りにいれてくれた方も本当にありがとうございます。
昨日は設定ミスで2つ投稿してしまいました。
まあ、あわてん坊のサンタクロースだと思つて大目に見てください
ね。

クレアにまかせなさい」

クレアのおしゃべりに付き合つてね～。

首にかけているペンダントがピクンと震えた。見ると普段は緑色の宝石が赤く点滅している。

「あらあら～いけない子がいるみたいねえ～。」

さすがに近くを離れたのは失敗だつたかしら？

2人に気を使つてあげたつもりだつたけのだけど～。

バタンと音がして扉が開いた…スー君だ。国王をやつぐるこの子がノックも忘れるなんて、よほど焦つているのかしら～。

あら？ 後ろからメリッサ王妃もついて来てる？

「ク、クレア姉ちゃん！ コータがミルを連れて飛んで行つてしまつた！ 護衛の者達はとても追いつけなくて！ ミルを探してくれ！」

「スー君～、2人のデートをつけちゃダメって言つて置いたでしょ～。あとでお仕置きよ～メツ？」

スー君は顔を真つ青にして平謝りしてきた。子供のころに少し教育しそぎたかしら～。

「それより庭の植物園に神官と宫廷魔術師を全員呼んで～。”呪い返し”をするわ～。狙われているのはコータだけどそばにいるミルにも被害が出るわよ～。

「なんと～わ、わかつた直ぐ行かせる～」

来たときより急いで帰る。王妃メリッサ……この国にいるむかう一人の姫巫女が近寄ってきた。

にこやかな笑顔でまつすぐペンダントを見ている。そして手を差し出してきた。

「そのペンダントは私が預かりましょ~。」

「これは…守護石ですわよ~？」

守護石はペアとなつている…片方をもつている相手の災害を引受け る効果がある。

その災害を受けている間は赤く点滅するのよね~。

「コータさんを護るために片割れを渡されているのですね。返しの術の行使に影響があるりでしょ~。私が預かるように…女神のお告 げがありました。」

あらあら、大きい姫巫女ちゃんはスー君より度胸があるわね~。

「いいのかしら~? たぶん「黒竜の怨念」よ~。」

知らぬ者がいない恐怖のカードの名を聞いても王妃がにこやかに微 笑んだままだつた。

「ミルをもう一度失つことに比べれば…平氣の平左衛門ですわ。」「ん~、ではお願ひするわね~。」

んふふ~

じゃあ~久しぶりに本氣を出させてもらひわ~。

100年ぶりくらいかしら?
エ・クレアにすべて任せてね～?

姫巫女とのデート（3）

「コーラの語りです。

「幕」の詠唱呪文でボディーを作った。
「風」のカード魔法をエンジンとした。

今、俺の作った魔法飛行機でミルと2人、空を飛んでいる。
後ろにミルがバイクの2人乗りみたいに寄り添つて乗つていてるかた
ちだ。

2人で、

城を見たり、
街を見たり、
山を越えたり、
本当に楽しい

雲に突っ込んだり（むちゃくちゃ寒かった）、

「コーラ！海が見えて来たのー。」
「おースター！綺麗だなー。」

美しい砂浜がみえる。
綺麗な青い海に出ですぐのところを旋回する。

「『一タ… ありがとう。』

背中にミルがほっぺを押し付けて来た。

「『一タがいなれば私… 何も知らなかつたの… こんなに感動しなかつたの…。』

「…ミルが海を見たくなつたら、またいつでも連れて来てやるよ。おお、海に何かいるぞ！」

ミルが泣きそうな雰囲気だつたので氣分を変えさせようとまわりを見て話題を探していたら海に何か見えた。
なんだろ？ デカイ！

「魚かなー？」

「にしてもでかいなー 50㌢くらいあるんじゃないかな。」

見てみると、大きな魚は水面に頭を出し、顔をしきりに向けて來た。
そして…

「ウハハハハハ！ 面白い顔になつたぞー！ ほっぺた膨らませてやがんのー！」

「顔だけタコになつたのー…えつ？」

物凄い勢いで水を吹き出して來た！
そーかー、それで膨らんでたんだー。

クレア困つちゅう

またクレアのおしゃべりに付き合ってくれるの~ありがと~。

このお城には私専用の植物園があるの~。
そこには私が持ち込んでお城の人々に育ててもらつていた植物があるわあ~。

これはね~スー君達が呪われたとき用の対策なのよ~。
王妃を植物園の中央に座らせてから~植物達にお願いしたの~。
植物達は私のお願いを聞いてくれて王妃のまわりで成長して~、模様を描いて~、花を咲かせたのよ~。

はーい、お花の魔方陣完成~?

スー君がたくさんの人たちを連れてきたのが見えるわ~。

「はあ、はあ、クレア姉ちゃん~ごほん!エ・クレア殿。言われた
ように人を集めてきたぞ!」

「ありがとう~。スー君の奥さんがこの呪いを引き受けるから私が
”呪い返し”をするわ~。魔術師はお花の魔方陣の外で「呪破」
の魔法を、神官は「浄化」の魔法を使ってね~。」

状況を説明したらみんなびっくりしていたが私の指示に従つてくれた。

みんなが配置に着くと空から大きな黒い竜が舞い降りてきたわ~。
半分透けていて実体感がないわ~。

魔方陣の結界に阻まれて動きが止まる。そして魔法使い達の呪文で
かき消えたわ~。

「やつたぞ。」

スー君の歓声が聞こえたわ。

「呪いは返すまで何度もくるわ。みんな気を抜かないでね。」

さあ～！私の番ね～。

実はもう呪い返しの呪文を唱え続けているのよ～。

私の場合、ヒルフ族特有の唱え方なのね～。

まわりからはよく…この唄いながら踊りながらって動きが…ステキ
～って言われるのよ～うふふ～。

しばらく時間がかかるので、ここに魔法の説明をしてあげるわ～。

この世界には神が使っていたとされる魔法文字があるの、これをルーンと呼ぶわ～。これを繋げて文にしたものが魔法の呪文よ～。
でもこのルーンには音がないの。書くことはできても読み上げることはできないのよね～。

音、つまりルーンの読みに相当するのが真音…マオン…なのね～。
真音は世界中に散らばっている。神々の紡いだ愛の言葉のかけらとも、精靈達の詩とも呼ばれているけどよくわかつていないのよね～。
魔法を使うにはその人が、何処かにある真音をどうにかして掴まなければならぬ。

きちんと魔法を勉強して、その真音の意味を理解していれば掴めるのよ～。

そして呪いは魔法の一種なんだけど、簡単にいうと…念…ネン…といつものが真音をくるんでいるのよね。念は想いの結晶、そして大抵の場合方向性…向かう向き…があるの～。

今回の場合、コータに向かっているのね。今は守護石のおかげでメリッサちゃんに向かっているのだけど。

私はこの方向を180度逆転させて、呪いを術者に向かわせようとしているのよ～これを呪い返しと言つの～。

あらあら、そろそろ準備ができたわ。

次の攻撃のタイミングで返しましょう。

でもおかしいわね。呪いのスピードがセーブされているみたい。返してくれつていいているようなものだけど……麗かしいわ。

まあ、返してから考えましょう。

「いくわ～！ のろこがえ…

(ワルイナ…)

「！！」

どこからか来た何かの力が…返しの力を…や、壊さないで～！

「うわあああ…」

「ぐうづ…」

「アンノルファイ様…ミルを…。」

「メリッサああああ…」

力のバランスが崩れて…メリッサが呪いに侵食されていく。失敗しちゃったわ～どうしよう～？

姫巫女とのデート（4）

「一タが語ります。

鉄砲魚…でつかいから大砲魚かな？

真つ直ぐこちらに向かつて来る水柱をそのまま受けるわけにはいかない、魔法を聖幕に切り替える。かたちは球体、当然聖幕は海水なんかでどうにかなるものではない。水に押されて打ち上げられたかたちになる。

「ひやーひやー…」「一タ！」

詠唱魔法「幕」つまり魔法飛行機を消したので、ミルが抱きついて来た。

聖幕の一部を糸にして四方に打ち出して姿勢を安定させると、今度は陸地に向かつて落ちていくので太い糸を出して地面に打ちこみ螺旋状にかたちを変化させた。

ビヨヨーンとスプリングみたいに落下の勢いを吸収させた、我ながらグッジョブ！

「ミル、大丈夫？」
「一タ…」

あれ、少し潤んだ瞳でミルがこっちを見ている。
抱き合つているし…吊り橋効果？

ミルが目を閉じた。

おいおい10歳だろ、お子様だろ。

しかし、今日の前にいる少女は…猫耳で…可愛くて…間違いなく美

少女だ。

俺も…目を閉じる…そして…

「あつ、クレア～。もう伝説の魔法出来たんだ～さすがクレアだね。
…うん、…うん、…うん、…あー大変なことになつてい…」
「「一タのばあかあー！」

クレアの張り手をつけて頬にもみじが…なぜ?

姫巫女とのトーク(4)(後書き)

10歳になせませんよ(笑)

老人の苦惱（前書き）

31日でこの話のヤマ場は終了します。

老人の苦悩

ブルートの部屋でワシは落胆しておる…ふう。

今回の呪いのターゲットは黒髪の少年…今も鏡に映つてゐる…この少年の近くに強い術者の気配を感じていたので呪い返しをして来ることは確實であつた。

まさしく見事な手並みの術者によつてワシの呪いは返されようとしていたが…その返しの力が霧散したのじや。

これほどの術の冴えを見せた術者が失敗したとは思えない…誰かに邪魔でもされたかのう。

こうなればブルートが戻つてこない今のうちに自分で自分に呪いを返すか?

しかし、ブルートに敵対する行動を取るとヤツの氷の呪いが発動する、難儀だことだ。

そんなことを考えているとガチャリと扉が開いた。
やれやれ、ブルートが戻つて来たてしまつたようだ。

しかも1人ではない、3人の魔人を連れてている。1人は岩蛇殿じや。

3人はルーンをびっしり書き込んであるマントを着てゐる。あれは呪いの力を弱めるものじやな。

この3人を呪いを返されたときの人柱にする氣か…性格悪いのう。

「首尾はどうだ?」

「守護石を使われていてのう…時間がかかつておる。」

「ふふ、呪いを返させるつもりであつたのではないか?」「さて、どうかのう?」

「食えんヤツだ…だがもう時間をかけるな。」

やれやれ。

今日はずっと鏡に映る2人の子供を見ていた…。

久しぶりに若い頃を思いださせてもらつた…。

死なせとうない…最後の手を使つかのつ。

呪いの黒竜を生み出し、今回は呪いの中心となる真音を込める。

このとき真音で隠しながら血らの魂の一部を切り離し埋め込んで送り出す。

魂の一部を”使い捨て”にする非常に危険な術じや。

これで氷の呪いから逃れて、一時的に自由な行動ができるじやろう。

では、いくとするかのう。

ミルのためなら（1）

コーダの出番です！

俺はクレアと連絡を取り合いながら状況を確認する。
俺には呪いがかけられているらしい。

その呪いは「黒竜の怨念」という子供でも知っているくらい有名で危険な呪い。かつて6の大地の半分を一夜にして荒野にかえってしまったという。

俺が首にかけているペンダントは「守護石」とよばれるものでペアの守護石を身につけている人が災いなどを引き受けてくれる品だ。そのおかげで、呪いはミルの母親のメリッサ王妃に向かった。

そして、メリッサ王妃が呪いにかかりてしまった。ただ、相手が直ぐに俺じゃにことを気が付いたらしく影響している呪いは一部だけ。メリッサ王妃は女神アンノルファイに愛でられている猫耳なので呪いの類に強い抵抗力があるらしいのでまだ大丈夫らしいが…。もうすぐ俺のところへ呪いがくるらしい。俺とミルは海岸近く。王城からは1時間半くらいかかると思う。

（メリッサさんはどう？）

（神殿の方から増援で来てくれた人たちにはこの呪いをなんとかできる力を持つ人はいないのよ）。そんなに長く持たないわ、ごめんなさい〜。）

（くつ…どうすれば助けることができる？）
（せめてミルがここにいれば…姫巫女は祝福を使えるから。姫巫女の祝福は特別だから…。）

（俺の判断ミスだ…ミルに見られないようになんて思つて服のしたに付けたから…守護石を服の上に見えるようにしておけばもっと早

くに気が付いたんだ！せめて俺が使い方を聞いていればこんなことに……使い方？）

不意に思いついた！カード魔法「触診」で守護石を調べる……深く……うん……もしかするかも？

（クレアーミルが守護石のペンダントを身につけて自分に祝福をかけばメリッサさんに届くんじゃないか？）

（え～そんなこと考えたこともなかつたわ～。ちょっと待ってて～。ん～え～とう～で、なんとかなりそうねえ～でも保証は無いわよ～。ともかく今のところベストな選択よ～。）

守護石はペアの相手にステータス変化を送るアイテムだ。つまり呪いみたいな悪いことだけではなくて、良いことも送れるアイテムなんだ！

ミルはメリッサさんがの呪われたことを聞いて泣いていた。

「ミル！君の力が必要だ！」

「え？」

「この守護石をかけて。これはメリッサさんにつながっている。ミルが自分に祝福をかければメリッサさんに届く。今メリッサさんを救うにはこの方法しかない。」

「……でも「黒竜の怨念」なんでしょう……自信ないの。もし失敗したら……。」

「ミルは俺のことをいつも信じてくれるよな？だったら俺の言葉を信じろ……ミルなら絶対大丈夫だよ！俺は世界で一番ミル信じているから。」

「……「一タがそう言つなら……そつ言つてくれるなら……うん！私はコータを信じるの！」

「それでこそミルだ！」

「わたしも頑張るから……だから……コーダも呪いに負けないでほしいの。」

そういうと、ミルは守護石のペンダントを首にかけ、跪いて両手を組み祈り始めた。

祝福の魔法が発動したのか……ミルの体がオレンジ色に輝き出す！
最後に見つめ合ったときのミルの瞳が目に焼き付いている……
泣いていた……あんな顔を俺がさせたのか……

（いいわ～。完全じゃないけど、呪いが蝕んでいる範囲が後退した
わ～。ミル頑張って～。）

俺は空を見上げた。そこには黒い大きな何かが近づいて来るのが見えた。

マーフィーもいない……

クレアもいない……

「黒竜の怨念」に打ち勝つ方法もわからない……

それでも……

ミルを悲しませないためなら……

ミルの笑顔のためなら……

俺は……

ミルのためなら（2）

少し長いです。

俺はミルの「祝福」の魔法の邪魔にならないようこの場から移動した。

カード魔法「聖幕」の一部をスプリングのように使って高速で移動した。

しかし、空の黒い何かもこちらに向きを変えてくる迫つて来る…逃げる切れる相手ではないだろうな。

もうかたちもしつかりわかる…竜だ。

半透明だが全身が黒い。

四本の脚に長い首としつぽ、コウモリのような羽…元の世界では空想上の生き物の姿。

この戦い、ミルのためにも絶対に負けられない！

まずは、「聖幕」と「触診」で作った魔法を「センサーダッシュ」で調べる。

測定対象：黒竜の怨念（特殊タイプカード魔法「呪い」）

現在の測定対象は真音を含みます、つまり呪いの本体です

属性：闇（魔）

効果：対象一人を呪い殺す、そのときその者が願えば約半径200km内の生命力を奪う追加効果を発動する

呪いの解き方：不明

その他：カード使用者の魔力は使わないが、使用者の命を奪うことがある

追加情報：聖幕の防御効果を上回っています

うーん、聖幕でなんとかなるんじゃ無いかと少し期待してたんだが……。

他のカード魔法で仕掛けるか？

でも威力がたりないか？

とか思ついたら目の前にいきなりの来た！

瞬間移動か？

実体が無いからか？

黒竜は口を開けて……うお！…吸い込まれる！

竜に飲み込まれて俺は意識を失った。

目を覚ますと建物の中にいた。

見覚えがある……ここは……祖父の蔵？

間違いない……入り口に近づくと鉄格子の先に外が見えた。

見覚えがある庭と実家が見える。

俺は元の世界に戻つて来たのか？

ズキン……不意に頭に痛みを感じた……。

ブルブル……身体に寒気を感じた……。

この感覚は……覚えがある……これは……。

あのとき……そう……10歳の頃、俺が弟から電話がかかってときに嬉

しくて長電話した後、祖父に「教育」と言われてここに放り込まれたんだつけ……。

祖父は俺が自分の氣に入らない行動を取ると「教育」といつてここに朝まで閉じ込め放つておかれたつけ。

ここは、思い出したくない場所…

ここは俺が絶望した場所

いや…

俺が祖父母への説得を諦めた場所

そんなことは…

俺が家族みんなで幸せに暮らすこと諦めた場所

諦めたわけじゃ…

諦めた
いい子を演じることをやめなかつたのは、家族のためではなく単に
自分のためだ

違う…

違わない

ここはお前が全ての人を怨みはじめた場所

違ひ…違ひんだ…

違わない！

お前の怨みはこのときから蓄積されて来ている…山ほども高く、海
よつも深く

うそだ…

うをついてこるのはお前だ

#かっこつけ

この怨みは今も消えていない

言わないでくれ

全て本当だ…

そう思っているんだ…

怨んでいるのだ…

お前自身が…

そうだ、お前はしなくてもいい苦勞をさせられた！
しなくともいい痛い思いもした！

苦しかつただろう！

悔しかつただろう！

もういい！

耐えることはないのだ！

その思いを！

怨みを！

抑えることはないんだ！

俺が力を貸してやろう！

お前を苦しめた全てを葬る力を貸そう！

そうだ！

全てを始末するんだ！

そうすれば、お前は全ての苦痛から開放される！

全てを怨むがいい！

我を受け入れるがいい！

さあ！

俺は…

俺の答えは…

お言葉ですが…黒竜様はドアホウですか？

：今なんて言った？

怨みの対象は『写しの世界』にいるんだよー

お前がそこまでいけるかつてんだ！

第一、祖父は死んでしまつてるんだよー！

だからド・ア・ホ・ウ！だつて言つてんだよー！

この間抜け！

景色が消えた…暗い空間の中で俺の田の前に黒竜がいた。

（愚弄しあつて！愚かなヤツめー！）

（へん！俺に世界を怨むことを〇×させんつもりだつたんだろう？ム
リだぜー！）

（ならばお前を呪い殺すまでだー！）

黒竜が黒い塊になつて俺を包み込んだ。
すると全身が冷たくなつていぐ。

感覚が消えていく。

くつ…こんなヤツにやられてたまるか！
しかし、対処法が全く見つからない！
やばいー！

（少年よー！竜の本当の声を聞けー！）

（貴様！俺を起こしておこして邪魔する奴かー！）

本当の声？

なんだ？

誰の声なのか、を気にする余裕はなかった。

ただ、その真意を解くために耳を済ませる… 本当の声って… 聞こえた！

泣いている…

(ビードードード… 泣いてる…)

(聞こえるの？僕の声が… 助けて…)

わっさは漠然と「耳を済ませると」「思ったがクレアの授業…」「心を真音に集中する感覺」と似てた。

センサーダッシュも真音がここにあるって言つてた。

ここにある真音は「黒」と「龍」か？

いや、黒は呪いの… 念の表現だとして… 「龍」か！

そう考えた途端、輝きが見えた！

あつた！

(僕も君が見えた！僕を掴んで…)

(させるか…)

身体の感覚がほとんどなくなってきた… 視界までも奪われた…。
つら… が… このくらいなんだ…！！

”聖なる槍”に力を注がれたときほどではないぜ！

それにミルが待ってるんだ！

(「龍」俺のところに来い！面白ごっこをしようつー・楽しもせてやる

ー・きっと楽しいぜー)

(行く！連れてってー)

闇を討ち払い金色に輝く真音が俺に突っ込んできた！

掘んだぜ！

（うぐ…バカな…こんなガキに…）

「竜」の真音を掘むと俺を包んでいたモノが霧散した。呪いを倒したのか？

よく見ると、近くに竜と老人がいた。

（長い間、闇にとらわれていたんだ…本当にありがとう…）
（そういえば、クレアが高位の真音は自我を持つてゐるって言つてたつけ。）

（うん！貴方もありがとうございます。）

（ほつほつほつ気にせんでよい。正直、ここまでうまく出来るとは思わんかったわい。お主は呪いの天才のようじや。弟子にほしいのう。）

（スルーパス！爺さん！）こは礼をいつといふだが先に答えてもらおう！なぜ俺を狙つた！）

（お主を狙つているのは3魔王の副官ブルートじや。ヤツは魔法の鏡でお前をいつも見ることができ、注意するんじやぞ…）

（あんた…）

（ワシの体でヤツの呪いが発動したよつじや…。猫耳の嬢ちゃんと達者でな。）

老人の姿がふつと消えた。

あつ…礼を言ってないじゃんか、俺！

まあブルートのところなら…あの爺さんにもう一度会えるかもな。

（下に降ろすね。）

おおー！ いつの間にか竜の背中に乗つてるじゃん！

俺の乗つた金竜は軽やかに宙を舞いミルの近くに降りるとミルが飛びついてきた。

「いぬおおおおだあああああ！」

「うわっさー泣くなつてーメリッサさんは？」

「だいじょおふーミルがんばづだよー。」

せっかくの美少女が台無しだぜ……。

少女の温もりが自分が今生きていることを実感させてくれる……。

よかつた…俺はミルがいたから…。

元の世界で精神の限界を迎えていた俺…。

ミルがここで俺を受け入れてくれていなかつたらぜつた負けていた

…。

俺は上を向きながら…抱いたミルの猫耳をいつまでもいつまでも撫で続けた。

俺はミルのためなら…”生きる”ことができたんだ。

ミルのためなら（2）（後書き）

明日でこの話は終了です。

この物語が終わるわけではありませんよ。

ひとまずの決着

「コーダが黒竜に飲み込まれて魔法の鏡にコーダが映らなくなつた…。黒い闇が映るだけ…。

この部屋は不気味な静寂に包まれている…。

魔王ケンプの副官ブルートの部屋はかなり広い。

今ここにいるのは、ブルートと呪いの術師、蛇族の魔人の岩蛇、炎蛇、飛蛇の5人。

術師の老人は座禅を組んで目をつぶり、ブツブツ呪文をつぶやいていたが…身体が青白く輝き始めた。

老人の身体に氷の結晶が浮かび上がって包み始めた。

これはブルートの呪いか…裏切ると発動するタイプだな。

鏡面がまた映像を映し始めたとき…「コーダが金竜に乗つて空を飛んでいるのが見えた。

ヤツパリスゲー！

俺を楽しませる天才だよな、コーダは〜。

ケツケツケツ。

「ふふ、見事な”開放”じゃ、呪いを解かれたわい。一言の助言だけで…真の天才じゃ…本当に弟子に…欲しくなつたのう…この歳で初弟子を取りたいと…思うとは…笑…え…」

そうつぶやきながら崩れ落ちる老人の身体の表面に次々に氷の結晶がいくつも浮き上がる。

その老人を魔人ブルートが冷たい目で見下している。

「役立たずめ…そのまま凍え死ぬがいい！」

ブルートがそう言ひはなつて部屋を出て行こうとしたとき、不意に

声をかける者がいた。

「蛇族の族長よ、貴方を見限らせてもらひ。」

そう言つて岩蛇は老人にマントをかけた。このマントには呪いを弱める効果があるルーンがびっしり書かれている。

「『老人、飲むがいい。氷の呪いにはよく効くそうだ。』
「マズイし、からいケドな、ソレ。ケツケツケツ。」

「身の程知らずの愚か者どもめ。」

ブルートが魔力を紡ぎ始めた。

岩蛇達の前に炎蛇が進み出てブルートと対峙する。

炎蛇も魔力を紡ぎはじめる。

それを見てブルートがあざ笑う。

「貴様の炎でどうにかなると思つなよー！」

やがて術が完成し、両者が同時に魔術を放つた！

「【氷】【結】【破】！」

「【熱】き【旋】【風】！」

炎と氷の魔術がぶつかり部屋が吹き飛ぶ！
大量の水蒸気が姿を隠す。

その隙に岩蛇と老人を回収する。
ついでに鏡も。

「馬鹿な……炎蛇」ときがこれ程の……！……貴様らー！テスー・マー・フィー

！」

「ケツケツケツ。なつテス！オモロイだるー。」

「先に説明くらいいしろ！たくつーお前は昔からそういうヤツなのだから！」

そう、炎蛇に化けたのはテス。

飛蛇に化けてたのはオレ、マーフィーだ！

3魔王城に潜入させて置いた岩蛇達に、たまたま情報を聞きにきていたんだがコータが狙われているってんで急遽テスを誘つて見物させてもらつてたわけだ。

今回の件、写しのコータが死んでオレも死ぬかもしかつた。だが、あいつがここで死ぬ様な男だつたらオレは…俺達はそこまでだつたつてコトだ。

まあ信じてたけどな。

「ブルート！この前の借りを返させてもうりつー！」

「ふんっ！マーフィーと2人がかりか？」

「わたし1人で十分だ！マーフィー、先に行け！」

「んじや、あとよろしくー。」

「テスよ…実力の差は教えてやつたはずだ！」

ケツケツケツ！

先日シェリーが行方不明になつた日、テスはブルートに力勝負で負けたらしい。

あいつ負けず嫌いだからな、これだけ見ていいこう。

再度、ブルートとテスが放つた炎と氷の魔術がぶつかる。

先程よりはるかに大きな衝撃に今度は3魔王城全体が震えた。

テスはそのままの位置にいる。

ブルートは…押されて下がつている。

「そんな…まさか…マーフィーから”4”を…”魔王”的力を譲られたのか！」

「私が貴様に手も足も出ないで倒され封印された経緯を聞いてのマーフィーの推理、”3魔王をケンプから譲られている”は当たつたていようだな…。」

「マーフィー！貴様は…この、この力を！惜しくないのか…！…ケツケツケツ、いらね～し～ケンプのヤツはどうだつた？潰つたかい？」

「…。」

「テス…派手にやりなー。」

後をテスに託して空に飛び立つ。

テスなら1人でも大丈夫。

オレはもう魔王ではない。

だが今なら魔王でもけちらせる気分だぜ！

それに逃げる実力なら元々”世界一”だしー！

…ここ、”ロータなら突つ込むかな。

それにして、これだけしてもケンプの気配がない。

やはり…2人はここではないか…。

影族の最後の生き残り…。

姫巫女シェリー…生きてろよ。

ひとがわの決着（後書き）

読んでもらってありがとうございます。

次の構想が白紙なので、1ヶ月ほどお休みをもらいたいとおもいます。

2月1日から再開いたします。

シルバーの願い事（前書き）

章にするために一つだけ先行して投稿しました。

以前に書いたとおり、2章は2月1日から投稿します。

今回は導入ですのですが2月1日からの話と直接はリンクしません。

シルリーの願いこと

今…。

私は幸せ…。

何もしなくてもよいから…。

戦うことも…。

奪うことも…。

憎むことも…。

悲しむことも…。

薬指にはめた指輪から力が吸い取られていく…。

恋人が送ってくれた指輪がそういうものであることはわかっていた…。

どうでもよかつたのよ…。

あの日から…。

私は私ではなくなってしまったのだから…。

私は魔人の1部族…影族のプリンセスだった。

それ以外に価値のない、何の力もない少女だった…。

少女の私は憧れていた…。

年上の部族一の戦士…マーフィー…。

彼は他の誰よりも強く、賢く、そして残酷で…自由に生きていた。

彼に憧れ…恋をしていることも周りに伝えられない…。

そんなどだの女の子だった私…。

あの日…。

魔王会議が間近に迫ったあの日に
あれは起こった…。

あの日、私の父は病氣の祖父から一族を任せられ…魔王の力を譲り受け
るはずだった。

しかし、譲られた直後に何者かに2人は襲われた。

不意を打たれた父は倒され……魔王の力は奪われてしまつた……。

すぐにマーフィーはその者を追いかけていった……。

その間に魔王の力のない我ら一族に、今まで従えてきたもの達が反乱をおこした。

ついには大軍に皆を囲まれ、明日にも全滅するしかない……と……。

祖父は禁断の奥義を使うことにした……。

1人の影に残りの一族の者が影になつて入り込む「影融合」……口伝によると魔王並みの実力を持つことが出来る影族最後の技……。

皆が飛び込んでいった……。

私の影に……。

誰もいなくなつた……。

そして……。

気が付くと敵も見方も……。

誰もいない荒野の真ん中で……。

ポツンと立っていた……。

幼子のようになく私のところに…。

彼が戻つて來た…。

私以外の唯一の生き残り…。

彼はは取り戻してきた魔王の力を私に渡してきた…。

あなたが持つていて…。

そう願う私の言葉に彼は首を横に振つた…。

「魔王達は、魔王以上の力を持ったお前の存在を決して許さない…。

お前が生き残る方法はただ一つ…お前が魔王になるんだ。」

私は…生きる道を選んだ。

魔王会議ののち…。

「大魔王」の力を得た私は不要になつた魔王の力を彼に渡した。

そのとき知つた…。

気が付いた。気づいてしまった。

彼は、マーフィーは、私を見ていない。

私の影だけしか。

一族を失い、耳も失った。

全てを失った私に残されたのは、大魔王、魔人の救世主の肩書きだけ。

私は影になりたかったのよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6260y/>

猫耳姫巫女と聖なる槍の担ぎ手と
2012年1月10日23時45分発行